昭和48年 2 月18日発行通巻100号(毎日曜日発行) 昭和48年 1 月12日国鉄首都特別扱承認雑誌第1245号

朝日=ラルース

2/18

220円

99

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〞は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説(2)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《1〜128号の内容は表3参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〞としてだけでなく，引いて調べる〝事典〞としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〞として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〞全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表3「本誌の購読について」をごらんください。

目次

世界動物百科　第99号

カラーページ

ハト目	7
ハト科	8
モリバト	12
カワラバト	19
ドバト	20
リョコウバト	23
コキジバト	24
キジバト	26

私たちの仲間

サファリ（中）　人と動物	小原秀雄	3
悲しき習性　その1　アマゾン動物記 11	伊沢紘生	6
カラーページ解説　ドバトの代表的品種	黒田長久	27
キジバトの生態	野沢進之輔	27
生きものの世界への疑問 4　自然淘汰の役割	日高敏隆	28
漢字のふるさと 70　鵠（ハクチョウ）	藤堂明保	29
ペット相談室・仲間のひろば・裏表紙説明		30

表紙　クジャクバト　Ph. Holmès-Lebel
表2　**日本迷鳥録**　ソデグロヅル

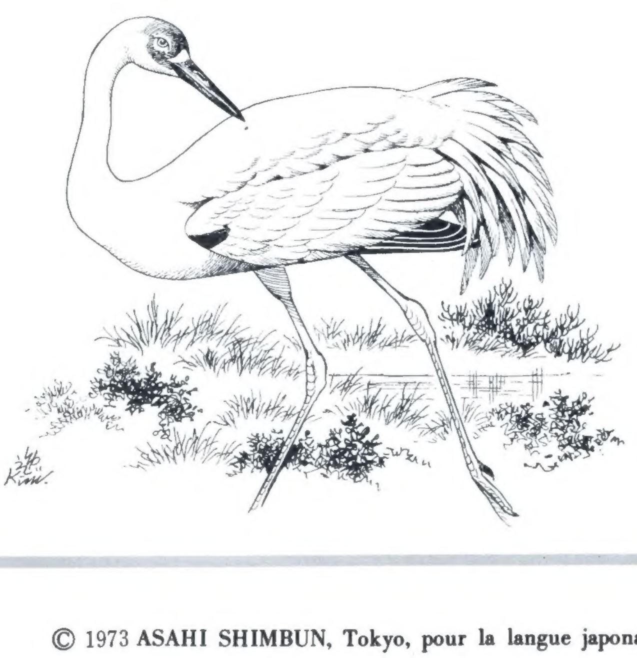
監修　黒田長久（日本鳥学会会頭）
翻訳　支倉崇晴（横浜国立大学助教授）

凡例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注1〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆ 33

ソデグロヅル

Grus leucogeranus



文　内田康夫
え　木村しゅうじ

ソデグロヅルは全長1.2メートル，ソ連の中・東部で繁殖し，初列風切羽などが黒いほかは全身白色，頭上と顔は裸出して赤く，あしもまた赤い。

このツルは，徳川末期に来日した医者で博物学者のシーボルトが，その著書『ファウナ・ヤポニカ』に記し，4点の日本産（といわれる）標本がライデン博物館などに所蔵されているということ以外，日本から絶えて記録のなかった鳥であった。ところが，1959年12月から翌年2月にかけて，ツル渡来地として有名な鹿児島県荒崎で幼鳥1羽が越冬し，100年ぶりの出現と大騒ぎになった。そして翌冬も幼鳥1羽が荒崎へ，また，1961年4月には成鳥1羽が石川県羽咋市に渡来し，さらに1969年11月には沖縄県与那城で成鳥1羽が捕えられた。

このように，長いブランクを置いて，再び記録が出てくるのは，どういうわけだろうか。こうしたことは，ソデグロヅル以外にも例が多いのだ。■

サファリ 中

小原秀雄

人と動物



ハゲワシが舞っていた。ツァボから出た舗装道路のすぐわきなので，車中からもすぐ，何かの死骸があると見てとれた。歩いて近づいていってみた。公園のなかは徒歩で歩いてはならないが，ここは道路である。

死体はつの，ひづめ，それに骨と皮の大部分をとどめているものの，肉はほとんどない。早くもハゲワシが食いつくしたのだろうか。アフリカの屍肉食いの代表ハイエナは，まだここに到着していないのであろう。ウングリアロッジではブチハイエナを２頭見たが，国立公園のなかではほとんど見ていない。

いつどこでできあがったものかわからないが，アフリカでは動物の死体に，たちまちたくさんのハゲワシやハイエナやジャッカルが群がり，ひと晩でそれを骨にしてしまうというイメージがつねに念頭から去らない。しかし，これは少し違う。

６年前のサファリでは，マーチソン・フォールズ国立公園で若いゾウの死体を見つけた。たくさんのハゲワシがすでに少し離れた樹上に群がっており，ゾウの皮膚には，かれらの白いふんが無数に付着していた。しかし，ゾウの死体はほとんどまだ食われていなかった。よく見ると腸が外にはみだし，それが食いつくされていたほか，柔らかいくちびるの部分も食い荒されてはいたが，他の部分はハエがおおいつくしているだけであった。臭気に息をつめ，顔にも蒸発した気流が突きあたるような感じで，いちだんとすさまじかったことが忘れられない。

一夜明ければ，ハイエナやジャッカルがこれをきれいにかたづけるのではないか。巨大な頭骨と骨の山が，わたしの頭をよぎった。

だが，そうではなかった。翌日，死体のまわりにハイエナやジャッカルの足跡はもちろん，ライオンのものさえたくさんあったが，くちびるの食われた部分がひろがった以外，死体は前夜とほとんど変わりなかった。



ほとんど骨ばかりになったイランドの死体
どうやら車にひかれたものらしい　ツァボ西からアルーシャへの道路ばたで

車に脅かされる動物たち

群がっていたハゲワシは，わたしたちが近づくと驚いて少し退いた。死体はイランドだった。イランドのおそらく雌であろう。つのはやや細めだったが，よくねじれていた。さすがに最大のレイヨウだけあって，縮んだような死体でありながら相当な大きさだった。

自然死とは思われないので，密猟なのではないか，とドライバーに話しかけると，「ときには密猟もあるが，皮もつのもそのままなところをみるとそうではないだろう。病気ということもあるかもしれないが自動車事故の確率がいちばん高い」と答えた。確かに，道路にも近いところだし，車の事故と考える根拠はある。

道路沿いに「動物に注意」とか，「ゾウに気をつけよ」といった標識が目だつようになった。それだけ事故が多いからであろう。

敏捷で，高度に運動神経の発達した野生動物が車にひかれるということは，なんとも意外な気がする。しかしまた，動物は身にそなえた感覚の範囲で運動するのだから，自動車といったものへの対応の方法をまだ知らないということは考えられる。トムソンガゼルやグラントガゼル，それにシマウマなどは，高速で突っ走っていて，不意に自動車の正面を横切って方向を転換することがある。これはどんな意味のある行動なのだろうか。相手が肉食獣だったときには，追いつめられそうになると急にジグザグに走って相手の目標を狂わせるのに役だつかもしれないが，自動車に対してこういう行動をするのはかえって危険なのだ。

今まで動物たちの世界では，自然がつくった生物的な力や運動が働いているだけだった。動物たちの能力は，その範囲内のものだった。それは単なる能力ではない。スピードにしても，レイヨウ類は時速80～95キロメートルは優に出せる。だが，人間がつくりだした自動車というものの運動法則を知らず，それには対応しきれないのであろう。

人間も，ホモ・サピエンスとしてはせいぜい秒速10メートル，時速36キロメートルである。それでからだをかわしたり，ぶつかるものをよけたりしている。その人間が自動車を時速100キロなどというスピードであやつっていて，〝注意１秒けが一生〟といわれてみても，このスピードは生物としての反応の限界をはるかに越えた状況なのだから，とても無事にはすまないのではあるまいか。

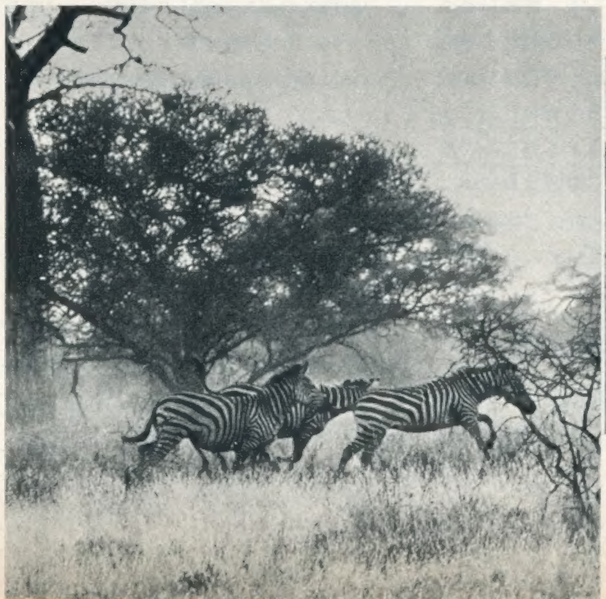
文明という力を持ち，それにより長い歴史をへてきた人間でさえこんなありさまなのだから，自動車文明が急にアフリカの荒野にはいりこんできたことに対する野生動物たちのとまどいは，想像にあまりある。ハゲワシについばまれて空洞になったイランドの目は，文明の意地悪さに抗議するかのようであった。

文明による圧迫

国立公園に宿泊できなかったわれわれは，アルーシャの町で１泊した。前にきたときと同じホテルに泊まることになったが，食事は今回のほうが少しうまくなったような気がした。ますます文明化されてくるのだろう。午後から時間があいてしまったので，ショッピングにいく人びととは別に，なんとか野生動物の見られるところへいこうとあがいて，ホテルのなかにある観光案内所で交渉してみた。できれば前にいった場所とは違うところへいきたかった。アルーシャ国立公園となったメルー保護区，ウンガドートト火口原，モメラといった所には前回もいっているので，あまり人のいかないタランジール国立公園にいくことにした。なにしろ遠いので，時速100キロ近くで車を飛ばしても往復４時間はかかる。夕食

私たちの仲間

99号…2月18日



オールド・アフリカのなごりをとどめるダランジールの野をかける
シマウマ（左）とオグロヌー（右）



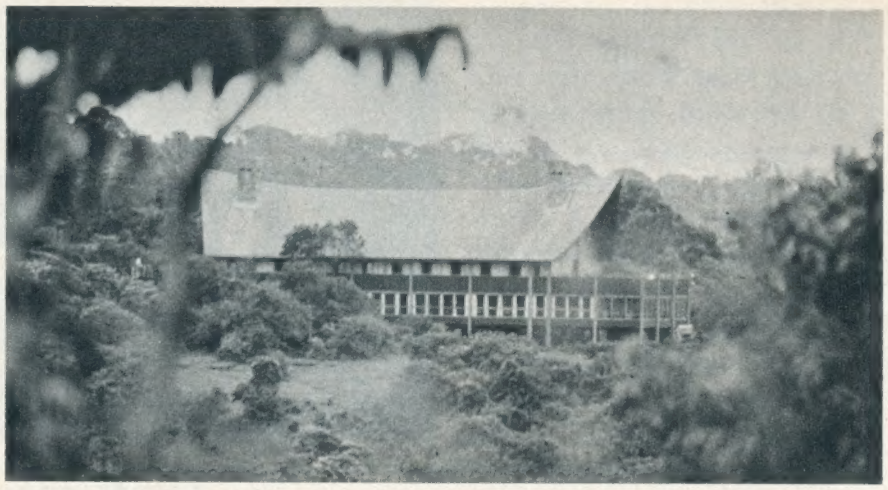
の時間までに往復しないと飯にはありつけない。国立公園は6時半には閉園と書いてあるので，あまり時間はなかったが，ともかく未知の場所は魅力だった。それに一般観光ルートからだいぶはずれており，昨年までは単なる動物保護区だったことも魅力だった。値段表にもなく，半日なので少しまけさせようと努力をしてみたが，距離がかかるから同じだといいまかされ，結局は少し遠めのレイク・マニアラへいくのと同じ値段で妥協した。

タランジールは，20世紀初頭の動物画家クーネルトが描く世界だった。かれのアフリカスイギュウの絵は，黄色の，文字どおりまったく黄色の草が深く茂っているなかに，黒いスイギュウが立っているものだった。それは，確か有名なブレームの大著『動物の生活』のさし絵になっていた。

あの絵で見た黄色い草が，いまもタランジールの野生動物の舞台だった。そのうえ，なかにはいりこんでいくと，谷あり川ありで変化に富み，黄色い草原はときどき水辺林やブッシュ，そして青々とした茂みにと移り変わる。

ここにはいったとたん，わたしたちはたくさんの草食獣を見た。ヌーやシマウマなど種類そのものには新鮮味はなかったが，かれらの群れの大きさと，人間に対しての行動が他の場所と違っている。

いっせいに走りだし，立ちどまってこちらを見る行動が特徴的だったのである。これは，いわば警戒行動である。観光客の多いところでは，こうまで神経質ではない。そういう場所では野生動物たちが自動車や人間を無害な存在と認めたのであり，また肉食獣たちは，それをえさではないと知ったというところなのだろう。野生動物は，もともと人間を自分の生活には無関係な隣人というような目で見ていた。狩猟されさえしなければ，この関係はそのままだったにちがいない。また同じ狩猟であっても，原住民の初歩的段階の狩猟ならば，草食獣にとって，リカオンやライオンに対するおそれと同程度だったろう。かれらはリカオンやライオンという捕食者に対してでさえ，アフリカにいった人なら見慣れてい



近代的設備の整ったアバーデア国立公園のアーク・ロッジ

ようが，ごく近く臨界距離内にはいらなければ平気である。臨界距離とは，それ以上近づけば逃亡し，追いつめられれば反撃する空間であって，ふつうその種の動物の安全圏の限界である。

だが白人がはいりこみ，プロハンターが生まれ，さらに土着の入植者が銃を使うようになると事態は一変し，従来の臨界距離は効力を失する。そして安全圏があればこそ，落ちついて自分の生活を確保できる草食獣たちを，神経質な日々の生活へと追いこんだ。強大なアフリカゾウたちは，おどして相手を退かせるむかしながらのやり方を変えねばならないために，混乱した。賢いゾウはそれでも，自分が惑乱したり傷ついたりしないかぎり人間から逃げるようになったが，サイは多くの場合その種の性質のままに，人間に襲いかかった。その結果，多くのサイが撃たれた。

さらに，草食獣にも肉食獣にも別の難関が加わった。草食獣は，自分の草地が農耕地に変化し，食物がなくなったのを知った。餓死か，移住か，新しい食物を食べるかであった。多様な植物を食べるゾウは，後者を選び，害獣として撃たれた。害獣の多くは，奇妙なことにつねに長大な象牙を備えていた。ゾウなどにとって，作物や果実は耐えられないほどの魅力ある食物である。それが，もともとわがもの顔にふるまっていたかれらの生活の場にありながら，今はとることを許されていない。

アフリカゾウにかぎらず，作物をとろうとするものは，人間から容赦なく排除された。肉食獣のほうは，草食獣が少なくなってしまい，代わりの食物として多くの家畜を獲物にしようとした。その結果，肉食獣も害獣として射殺されていった。もちろん一部は，人間とのあいだにトラブルを起こし，人食いとなって死刑にされるものもあった。

オールド・アフリカ

この急速な変化は，動物たちに相当の動揺を呼びおこした。かれらはまったく無残な状況におとしいれられてしまった。今は国立公園や保護区でまず一息ついている状態だが，それは全アフリカでわずか数パーセントの土地である。

タランジールの動物たちは，人間——ヘルメットと銃を肩にした——に対して，きわめて臆病なかつての大時代に生きる残党であろう。タランジールのキャンプ地で，ガソリンスタンドの前から歩みだしてみると，ゾウやサイの足跡がたくさんあった。またライオンやハイエナとおぼしいものの足跡も見られた。斜面の彼方には，茂みの下にクロサイがじっと夕日を避け，足下をイボイノシシとウオーターバックとが列をなして，まばらな林のなかを動いていく。彼方の深いくさむらにはアフリカスイギュウの群れの一部が望見され，数頭のアフリカゾウも歩みを移していく。

クロサイは，木の下でじっと動かない。ひょっとしたら昼寝かもしれなかったが，少し近づくと耳を動かし，からだを動かした。わたしは，しばらくの間，ほとんどクーネルトの描くオールド・アフリカのなかにいるかのようなムードのなかにひたっていた。

この日は，ゲーム・レインジャーに同乗してもらって，谷間を移動してまわった。ゾウやヒヒ，インパラなどが，シマウマと同じように神経質そうにわたしたちを見ながら，しかも間近に多数がいた。まったく，オールド・アフリカのイメージであった。

暗闇のなかを走行した帰路，ヘッドライトのなかを走りぬけたアフリカジャコウネコらしい夜行性の動物を目撃したこともあって，その午後はアフリカらしいアフリカに身を浸した日であった。このアフリカと，帰りついたアルーシャの都市と，途中の舗装道路（それは中国の援助でつくったとかいうが）の近代性とが奇妙なコントラストのもとに共存していること，それが今日のアフリカかもしれないが，そうとすれば，わたしたちが訪れたアバーデア山国立公園内のロッジ「アーク」は，その頂点であったろう。

アークへ向かう前，わたしたちはマニアラ湖国立公園からゴロンゴロ火口を過ぎ，セレンゲティとその周辺で多くの動物を目撃していた。動物の種の生活については この稿では触れきれないので，すべて省略するが，ヘビクイワシがヘビをまんまとのみこむところや，ハンス・クルークが研究したブチハイエナの一群が社会行動をいくつか示してくれるなど，いくつかの貴重な事実を目撃して気をよくしていたのは確かである。セレンゲティは，ひと口に100万といわれる草食獣がひしめき，ライオンの巣とかつていわれたほど，ライオンの多い地域だ。わたしたちも，ずいぶんライオンを見たし，幸いなことにヒョウも見た。もっともわたしと数人のパーティーだけは，ツァボでも茂みのなかを雄ヒョウが移動していくのを見てもいる。セレンゲティでは，トムソンガゼルが襲いかかるライオンのつめの下を，間一髪すり抜けたのを見てもいる。

わたし自身は，前のときには3頭のライオンが若いトムソンガゼルに襲いかかって，文字どおり八つ裂きにしたところを見ているが。

こういった動物の生活を見るのがひとつのおもなねらいだったわたしが，アークの夜の動物たちの静かな実態を見たときは，もういちだんと野生動物のすばらしさを味わったものだった。

セレンゲティからマサイ・マラへの帰途，わたしの乗っているマイクロバスは，アードウルフ（ツチオオカミ）を見つけた。それは実に美しく，めったに目撃できぬものだった。ドライバーが前の車に追いつこうと，全速力をあげていたために，すぐに見失ってしまった。マーチソン・フォールズ国立公園では，1970年の調査で，この国立公園内にたった16頭しかいないシロサイの母と子とが，小さい沼のなかでどろ浴びしているのも見た。これはアークよりもあとになるのだが，こういったものと肩を並べうる小型レイヨウのスニ（広い意味でコビトレイヨウの仲間）や，ジェネット（ジャコウネコ科）といった小獣がアークでは続々と姿を見せてくれたからたまらない。

アーク・ロッジ近くの水辺に現われたモリイノシシ
この動物も今世紀になって発見されたものである





サロンから見る野生の世界

アーク・ロッジは，こうした小獣たちが出てくる沼沢地に囲まれている。ロッジは小さなブッシュの点在する場所に建っていた。アバーデア山国立公園の入り口の前までは，田畑が豊かに実っている豊穣な場所である。巨大な連山とそびえ立つケニア山とのあいだの高原地帯は，肥沃なためもあり，また水も多いのであろう，多くの耕地があった。生活しているアフリカ人もまた，それなりに決して豊かとはいえないまでも，町や村落としてのにぎわいを見せていた。

自動車がアバーデア国立公園にはいると，樹上にクロシロゲレザ（シロクロコロブス）の小群がいた。マントのような白と黒との毛が美しいため，敷物用などに射ちまくられたかれらは，アフリカで一般に少なくなっている。その姿は梢に隠れこむ。不意にまたイボイノシシが走る。ゾウのふんは道にたくさんころがっている。少々観光客を喜ばし，冒険心をくすぐる演出でもあろうが，銃を腕にしたマネージャーが付添いになってきていた。

車が突きとばしたかのように，アフリカスイギュウが１頭むっくりと起きあがって走った。重々しい響きは，腹にこたえるようで，つのの巨大さを別としても飼いウシとは比較にならない重厚さである。このように茂みに潜んでいては，確かに万一に備える必要があるかもしれない。草原と違って，森林は見通しがきかない。この国立公園の内部は，そんな感じを抱かせるところだ。

このむかしのままのアフリカの風景は，アーク・ロッジを見るとまた近代へ急カーブする。ロッジは木造だが驚くほどガッチリした造りで，小型ホテル並みである。しかし，ここではベッドは仮眠用である。ロッジのベランダやサロンからは，サーチライトに照らされて沼のこちら岸の草原やブッシュ，低木林が見える。そこにはまた，多くの動物が夕暮れからうろついている。沼のこちら岸にある小さな水たまりのあたりには，２頭のアフリカスイギュウがうろついていた。



映画『巨象の大陸』に出ていたびっこのアフリカゾウ（いちばん手前）
マニヤラ湖国立公園で

１頭はどうみてもつのの先端がすりきれ，もう１頭はどのくらいの年齢かはっきりしないが，ともに堂々たる雄だった。ひとり暮らしであることはあとに群れが登場することでわかる。

起伏の多い土地に建てられたためか，ロッジの地下に当たるところは，スイギュウたちのいる水たまりと同じレベルになるが，そこに銃眼そっくりの観察設備がある。

アバーデアは高山地帯だけに，夜になると，しんしんと冷える。したがって，夜通しそのなかからのぞき見るのは容易ではない。上のサロンには，暖房の設備が整い，しかも大きなガラスが張ってある。そこが，野生動物とのあいだにひとつの距離を置いた観察所となっている。

モリイノシシが出てきた。黒い毛と巨大な頭とで，世界最大のイノシシと思われたが，それは現在では少々オーバーだと見られる。しかし，かれらが20世紀にはいって見つけられたのは事実だ。報告者のマイネル・アーゲンは，探しに探したあげく，頭骨と毛皮を入手した。かれはハンターでもあったのに，撃つこともできなかった。しかし今ではそんな珍獣も，コーヒーやウイスキーをすすりながら見られる。これをもはや疑似野生であり，動物の世界の堕落？　ということもできよう。

しかし，わたしは動物のほんとうの堕落？　は，食物を自分でとらず給食されるときからと思う。というのは，動物の本質的特徴のひとつとして，環境から自律的に食物を摂取することがあげられるし，動物の食物はすべて自然の食物連鎖のなかに組みこまれているものだからである。そこから生きる糧をもぎとるときこそ，野生の動物となるのではあるまいか。モリイノシシは，時間的にはイボイノシシがほとんど立ち去ってから現われた。同じような土地を利用しているかれらは，時間的にすみ分けているのかもしれない。

ジェネットが現われ，かれらがブッシュからブッシュを利用して動き，水たまりの近くで，エジプトガンらしい鳥にしのび寄ったのが見えた。ジェネットは平たくなり，まるでヘビのようだった。あわやという一瞬鳥は逃げ，ジェネットはそのまま向かい側のブッシュへ姿を隠した。ここで展開された動物たちのドラマのすじはともかくも，それを見ている人間とそれを演じている野生動物とのあいだがらを，わたしたちはなんと呼んだらよいのであろうか。人間が，文明をつくるとき，なぜこういった野生の世界をなぎ倒さねばならなかったのか，それが問題である。

なぜ自然は保護されるべきか

今，地球上の大部分では人類と野生動物たち（野生動物がいることは，それらを養える自然もあること）との間で，人間か動物かといった発想が中心である。しかし，どんな難関はあろうとも，人間も生物である以上，また類人猿にもどれない以上は，アークのようなありかたをとるのもひとつの考え方であることは確かだと思う。

自然の生態系のなかには，炭素や酸素が循環している。だから本質的に人間が要求するのは，そのシステムだという考えがある。文字どおり人工生態系の発想だ。しかし，炭素や酸素のにない手が，アフリカと南アメリカとはどうして違うのか。そしてまた，それぞれの地域で結局は独特な受け渡しや，そのしくみの複雑さがあることが自然の重要な働きだとエルトンなどはいう。物質の基礎的なしくみが，地域的な本質的なしくみによって動かされているのではあるまいか。

アフリカでは，飼いウシやヒツジが放牧されて，植物はしだいに利用されつくしている。同じウシ科動物ながら，同じ生態系内で野生のウシ科動物，アフリカスイギュウやレイヨウは1.25倍ほどたくさん生きられるという。肉としていえば，それだけ生産性が高い。しかも自然の生態系のなかでは，ときには旱魃や水害で個体数が多少変動しながらも，これらは自然を自然として維持させてきていた。

とはいえ，貧乏人はムギを食えではないが，肉のほうがうまくても（事実はアフリカの牛肉はまずいのだが），アフリカ人は野獣を食えではすまされまい。何度もいうことだが，野生動物は今では，人間の進化を問うための存在でもあり，自然生態系の構成要素であり，さらに人間という哺乳類の環境変化の指標でもある。人間のための利用法が変わり，できるだけ自然のまま置いておくことが，人間にとっての現代的な利用法となった。では，野生動物に代わって家畜が放牧され，野生動物が減少している実態を，どう考えたらよいのだろうか。わたしの目に映じたかぎり，以前アフリカにきたときには，放牧地にも野生動物が見られたが，今回は放牧地に野生動物はいなくなっていた。マサイ人が，財産としてウシを飼う習慣も関係はあろうが，こういった現実はアフリカの野生動物の未来に，ひとつの暗影を投じていた。

マニヤラ湖国立公園で，映画『巨像の大陸』に映しだされたびっこのゾウが目撃できた。かれらがいつまでも生きていけるのは，ゾウだからこそで，自然の法則性のもとではあるが，すべての面において自然に，野生動物たちが暮らしていけるようにする道を，あらゆる意味で探らなければ，人間は自分自身を救えないのではあるまいか。アフリカの野生動物は，人類すべての共有財産だとよくいわれるのだから——。■

（女子栄養大学教授）
撮影　小畔光一



アーク・ロッジ近くで見られた動物たち
左はアフリカスイギュウの群れ
右はブッシュのなかのウォーターバック



アマゾン動物記 11 伊沢紘生



クビワペッカリーの
おとなの雌

悲しき習性 その1

≪カグアン河の森へ≫

わたしがアマゾンにきて，森のなかを歩いていて最初に見かけたけものの足跡は，クビワペッカリーの足跡だった。

クビワペッカリーの足跡は，それからサルの調査に適した場所を捜して歩いたどこの森でも容易に見ることができた。クビワペッカリーはアマゾン上流域の森林どこにでも，かなり高密度に生息しているようだった。

しかしその実物を見たのはアマゾンにきてから2か月近くたった9月16日であり，森を歩いていてやつらに出合えるようになったのは，ベネージャ川右岸の森で本調査を開始してからのことであった。

カケタ河左岸の大きな支流，カグアン河へ予備調査にいったときのことである。カグアン河を河口から6時間半カヌーでさかのぼった所に，ラタグアで雇った案内人ホボの息子の畑があり，わたしたちはそこで一晩泊めてもらった。その夜，息子のヒルベルトや畑仕事の手伝いをしている若い男たちから，この周囲の森林の状況や，サルの情報を聞いた。

かれらは，ここから河を少しさかのぼった右岸に，友だちが畑を開いており，そこから森の奥へは，切った木材をラバにひかせて運びだしたときにつけた道がある。その道の終点までは荷物なしで歩いて5時間かかる。終点には小屋を立ててあり，小屋は今でも使える。そこからさらに半日ぐらい森の奥へはいった所に，人を恐れぬウーリーモンキーがたくさんいる，というようなことを話してくれた。

わたしはそれをもとに，次の日から5日間の調査予定をたて，必要最少限の食糧と装備を持物から選びだして仕分けをした。しかしどんなに選び分けしても，かなりの重量となり，ヒルベルトが同行を申しでてくれなかったら，この調査行は所期の目的を達成するにいたらなかっただろう。

≪ペッカリーを射つ≫

9月15日，わたしたち4人は仕分けした荷物をかついで出発し，幅2メートル以上もある森のなかの太い道を6時間余り歩いて，道の終点に着いた。ここまでくる途中，土のゆるんだ所には決まってクビワペッカリーの足跡がしるされていた。

その日はそこの小屋で泊まり，次の日，さらに奥地へ向けて出発した。点々とつけられているマチェテ（山刀）のわずかな切り跡をたよりに歩きはじめてから1時間余りたったころ，ヒルベルトの連れてきた2頭のイヌが突然，やや下り坂になっている右手の茂みへ走りこみ，激しくほえたてた。ヒルベルトは，その鳴き声を聞いたとたん，背負っていた荷物を肩からはずして投げ捨て，「セリージョ！」といい残して猛然と声のほうへ走っていった。すぐそのあと，ホボもかれのあとを追っていった。

わたしは歩き疲れていたので，リュックをおろし，その上に腰をかけてひと息ついた。そして，「相手はイノシシのようなやつだ。逃げていくそいつを，こんな見通しのきかぬ森林のなかで追いかけても追いつく道理がない。いったいどうやってつかまえようというのだろう」と，無数に寄ってくるヤブカをはらいのけるのにいらだちはじめながら考えていた。

かなりの時間が経過した。イヌのほえ声はとうにやんでいた。どうせ撃てるはずがないとたかをくくっていたわたしは，そのとき銃声を聞いてびっくりした。しかもその数分あと，ふたりは1頭の大きなクビワペッカリーをかついでもどってきたではないか。

そいつはおとなの雄で，左の目と耳のあいだをまともに射抜かれていた。体毛は黒みを帯びた灰色で，1本1本の毛はかたく太く，白と黒のまだらになっていた。また首のつけ根のところぐるりにだけは白い毛がはえていた。クビワペッカリーという名まえはこの白い毛に由来していることがわかった。

ホボ（右）とヒルベルト（左）はクビワペッカリーを1頭しとめてもどってきた



わたしはイヌたちがペッカリーとけんかをし，やつが一瞬じっとしたところをホボらがねらって射ったのではないかとそのとき思った。1頭のイヌは，左のほおをひどく裂かれ，そこの部分に大きな穴があいて，鮮血がしたたり落ちていたし，もう1頭は右の腰のあたりを切り裂かれていた。

ヒルベルトはそれからやつの内臓だけ取りだして捨て，あとはまるごとかつぎ，さらに3時間歩いて目的地についた。

目的地といっても別に何もない。わたしたちはビニールシーツを張って屋根がわりにし，その下にハンモックをつった。ホボはすぐにクビワペッカリーをばらし，塩をまぶした焼肉をたくさんつくってくれた。焼肉はとびきりおいしかったし，食糧をぎりぎりしか持ってこなかったこの調査行の，以後の生活に大きな潤いを与えてくれた。

≪倒木のほらへ逃げこむ≫

2度めにクビワペッカリーにお目にかかったのは，ベネージャ川で本調査を開始してから数日たった11月25日だった。まだ調査地域の観察路づくりをしているときで，その日はキャンプから真西へ向かって道を切っていた。

しばらく森の奥へ，真西に向かって道を切り進んでいったとき，ホボとヒルベルトはやや遠くのフサオマキザルの鳴き声をキャッチし，わたしはヒルベルトとふたりでその群れを追った。しかしまだ観察路がその方向にはつけてなく，茂みをかきわけながら歩いて，がさがさ音をたててしまい，逃げていく群れの最後尾と思われる4頭をちらっと見るのが精いっぱいだった。

もう少し追ってやろうと，「群れはどっちの方向へ向かっているのか」とヒルベルトのほうへ振り向いたとき，かれの背後100メートルぐらい離れたところからイヌが激しくほえたてはじめた。わたしたちはフサオマキザルを追うのをあきらめてイヌの声のほうへいった。

そこには，なかがほらになった1本の太い倒木があり，ホボが必死に周囲の低木を切っては，倒木のはしにさし込んでいた。イヌはそのまわりをぐるぐるまわっていた。倒木のなかからはきばを鳴らすカチカチカチッというかたい音が聞かれた。

「セリージョがこのなかにはいっている」

ホボはそういって，出口を完全にふさいだあと，倒木のなかほどの所にマチェテで穴をあけ，そこからやつが鼻づらを出したところをねらって撃った。

倒木のほらから引きずりだされたセリージョはカグアンの旅のときとまったく同様に，左の目と耳のあいだをまともに射抜かれていた。やっぱり雄だった。ただカグアンのやつにくらべて非常にやせていた。

ヒルベルトはすぐに腹を裂きはじめた。皮の内側には紫がかった肉腫（にくしゅ）がいくつもついていた。

「こいつは病気持ちだ。食えない」

かれらはイヌにすら，その場ではひとかけらの肉さえ与えず，近くの小川へ引きずっていって水のなかへ沈めた。道切りを終えたあと，ジャガーやオセロット用のえさとしてあちこちへつるすのだといった。

「セリージョはイヌに追われると木のほらなどに逃げこむのか」

「そうだ。そういう場合が多い」

「だけど，イヌが穴へ追いこんだとどうしてわかるんだ」

「イヌはやつを追っているとき，あまり穴に追いこむと，その入り口でイヌは激しく鳴くし，声が動かなくなるからすぐわかる」

「カグアンの旅のときもそうだったのか」

「もちろんそうだ」

ホボは，わたしが長いこと抱いていた疑問に答えてくれた。

クビワペッカリー（*Tayassu tajacu*）はふつう2，3頭から5，6頭の群れをつくって生活しているという。ホボは今までに最高18頭の群れを見たことがあるといった。プトマヨ水系での調査のとき，案内をつとめてくれたレギサモに住む名猟師ビジャミサールは，最高15頭の群れを見たことがあるといった。

クビワペッカリーを現地の人たちはセリージョと呼んでいるが，これは野生のとか，粗野な，という意味のセリールあるいはセレーロということばに由来するのかもしれない。■





ハト目　*Columbiformes*

ハト目の鳥の特徴は次のとおりである。

- ●頭は小さく，丸い。
- ●くちばしが短い。
- ●つばさは長くとがっていて，初列風切羽（しょれつかざきりばね）は11枚ある。
- ●あしが短く，趾は４本あり，地上歩行にも枝にとまるにも適している。
- ●胸骨にはごく高い隆骨があり，非常に発達した胸筋がついている。

ハト科，サケイ科，ドードー科の３科があったが，ドードー科は18世紀末に絶滅した。

ハト科の分布。
約285種があり
極北部と南アフリカのごく一部を除いて
ほぼ全世界に生息している。

ドバト。ハト科カワラバト属。
いつからハトは平和の象徴になったのだろうか。
神や仏や死者の霊まで利用する人間を尻目に
ハトは無心に群れ飛ぶ。（上）
PH. PAVLOSKY-RAPHO



ハト科　*Columbidae*

ハト科の鳥は，全長20～80センチ，頭は小さく，首は短く，羽毛（うもう）はかなりかたい。くちばしは両側がみぞ状にへこんでいて，短く，厚みがあるのがふつうである。くちばしの根元は肉が厚く蝋膜（ろうまく）を成しており，その下に鼻孔が開いている。くちばしの先端は鈎のように少し下側に曲がり，その部分だけが角質である。

あしは短くて趾が4本ある。うち3本は前に向いており，ごく小さい膜が根元に張っているものもある。つめは短く，しっかりしていて，ほとんど曲がっていない。あしのつくりは，樹上にとまるにも歩行にも適している。

羽毛は豊かで密生しているが，抜けやすく，皮膚が薄い。くすんだ羽色（うしょく）がふつうで，単調な灰色，褐色，黒色などが多いが，熱帯にすむものはあざやかな色合いのものもある。大部分の種では雌雄の形態の差がないが，雄が肉冠や飾り羽などをもつものもある。

内部構造でもっとも特徴的なのは，嗉嚢（そのう）である。繁殖期にはその内側の壁が厚くなり，ひだと網状細胞が多数あらわれる。この網状細胞ははがれ落ちて，栄養価の高い《ハトの乳》と呼ばれる物質となり，ひながはじめにとる食物となる。

あしは短いがじょうぶにできていて，よく歩く。非常に速いというのではないが，長時間の歩行に耐えられる。飛ぶときには，かなり大きな羽音をたてる。胸筋がよく発達していること，つばさがとがった形をしていることからわかるように，ハトはよく飛ぶ鳥である。えさを捜して毎日数十キロも飛びまわり，驚くべき方向感覚もそなえている。

愛と平和のシンボル

ハトの雄は一雌一雄制を厳守し，雌に愛情を示すため，数々の伝説を生んだ。またハトは，よく愛と優しさ，平和のシンボルとされている。だがこれは，おそらく過ぎたる名声であろう。なぜなら他の鳥でも優しく情愛に満ちた行動に変わりはないし，ハトは繁殖期に何かじゃまがはいると，卵やひなを見捨ててしまうのである。これは，ひなを養うえさによって繁殖期が季節的に限られている他の鳥と違い，ハトはみずからの嗉嚢から出る《ハトの乳》でひなを養えるので，あまり季節に左右されずに繁殖のやり直しができることにもよるのだろう。

ハトは好んで森のなかにすみ，かわいた場所や岩場にすむ種は少ない。しかし飛行力がすぐれているので，乾燥地にすんで毎日のどを潤しに長い道のりを飛ぶこともできる。

北方のスカンジナビアなどにすむ種は渡りをするが，温暖な地域にすむ種は大部分が留

ハ　ト　目

科	属
ハト科	カワラバト属，キジバト属，オナガバト属 *Macropygia* キンバト属 *Chalcophaps*，リョコウバト属，ハジロバト属 *Zenaida* ヒメバト属 *Columbina*，アメリカシャコバト属 *Leptotila* アメリカウズラバト属 *Geotrygon*，ミノバト属，カンムリバト属 アオバト属，ヒメアオバト属 *Ptilinopus*，ミカドバト属 *Ducula*
ドードー科	ドードー属，ロドリゲスドードー属
サケイ科	サケイ属，シロハラサケイ属

ハト科については，この表はすべての属を網羅したものではなく，代表的なものだけをあげた。学名を併記してあるものは，本文にその属がでてこないものである。

ズアカアオバト *Treron formosae*。
ハト科アオバト属。
琉球列島から台湾にかけてすむ。
全体が緑色をおびていて葉の色とまぎらわしく
特有の声は聞こえてもなかなか姿は見られない。
撮影　小笠原昭夫

モリバト。ハト科カワラバト属。
ハト科の鳥のくちばしは短く，丸みをおびている。
先のほうだけが角質で，先端は鉤になっている。
根元には厚みをおびた蝋膜があり
そこに裂けめのように鼻孔が開いている。（右）
PH. G. QUEDENS





鳥（りゅうちょう）であるか，せいぜい短距離の移動をするだけである。

種によって，つがいで生活するもの，小さなグループをつくっているもの，多数で群れを成しているものがある。渡りをするものでも，遠くまで移動することはまれで，ヨーロッパのものは例外的にサハラ以南までいくものもあるが，ふつう南ヨーロッパの地中海岸までしかいかない。

えさは，ほとんど植物性のものだけで，種子，塊根，漿果，果実などである。ハトは，のどのかわきをいやすためだけでなく，かたい種子をふやかして柔らかくして消化するためにも，多量の水を必要とする。ハトの水の飲み方には，非常に特色がある。他の鳥は水を口に入れてから頭を上げてのどに流しこむのだが，ハトは水を吸いこんで飲むのである。

ハトは，1年に数回営巣（えいそう）するものが多い。巣をつくる場所は，種によって木の枝，やぶ，岩穴，樹洞などで，まれに地上につくるものもある。巣そのものは，小枝を乱雑に積みかさねて皿型にしただけである。1腹の卵数は温帯では一般に2個だが，熱帯では1個の場合も多い。

繁殖期の間，雄は相手の雌だけにかかりきりである。倦むことなく雌の周囲をまわり，「クークー」と鳴き，尾羽（おばね）をひろげて見せたりする。また雌の頭の羽毛をくちばしでかく相互整羽をしたり，くちばしを開いて雌のくちばしを受けいれ，えさを与えるという育雛（いくすう）の動作をしたりしたのち，交尾が行なわれる。そして巣材は雄が運び，巣づくりは雌がする。

卵はふつう夜は雌，昼は雄が抱き，ドバトでの観察によると，その交替は朝10時ごろと夕方4時ごろである。14～30日間の抱卵（ほうらん）後，ひながかえる。かえったばかりのひなは，目は閉じたままで，からだには黄色っぽいまばらな綿毛がはえているが，裸である。ひなは完全にひとり立ちできるようになるまで，巣にとどまる。

ひながはじめて食べる食物は，親の嗉嚢の内壁から分泌される《ハトの乳》である。次に親鳥は，嗉嚢であらかじめ柔らかくした穀物などを与え，しだいに《乳》の分泌が少なくなるので，かたいままの種子や穀類にかえていく。

ハト科の多くの種は，農業に有害な雑草の種子を食べるので，人間の役にたつ面もあり，逆に作物の芽を害することもある。なお，熱帯産のものは果実食の種も多い。

ハト科には約285種があり，両極地方を除いて世界的に分布している。

モリバトの親子。
わが子をとって食おうというのではない。
嗉嚢から分泌する《ハトの乳》を与えているところ。
親は文字どおりわが身をけずって
子を育てるのである。（上）
PH. G. QUEDENS

キジバト。ハト科キジバト属。
ハトの巣は小枝を積んで木の上につくられる。
巣をつくり，卵を抱き，ひなを育てるのは
全部雌雄が協力という模範的夫婦。（右上）
撮影　黒岩武一

水を飲むキジバト。
ハト目の仲間はみんなそうだが,水を飲むときに
頭を上げてのどに流しこむことをせず
くちばしを水に沈め，ストローのように使って
ゆっくりと吸いこむ。（右下）
PH. DRAGESCO- ATLAS PHOTO









モリバト　*Columba palumbus*

ハト科カワラバト属の1種で，全長40センチほどの鳥である。羽色は全体に灰青色だが，くびにはタマムシのような金属光沢があり，つばさとくびに白い斑紋(はんもん)がある。尾の先端は黒く，胸はブドウ色である。ヨーロッパのほぼ全域から，トルクメン，ヒマラヤにまで分布している。

モリバトは文字どおり樹上性の鳥で，さまざまな森で見ることができる。葉が密生して茂っている森でも，針葉樹林でも，山中の森でも平地の森でも，人家の付近でも無人の土地でも，どこにでもモリバトはいる。大都市の公園にすむこともある。

一般にモリバトは漂鳥（ひょうちょう）である。もっとも北にすむモリバトは，規則的にヨーロッパの南部，西部に移動するが，その経路はくわしくはまだわかっていない。スカンジナビアのモリバトはフランスを横切ってピレネー山脈にいくが，その一部はフランスにとどまってパリ盆地で越冬する。

モリバト。
ヨーロッパ各地の林縁部に広く分布する。
あまり人を恐れず，しだいに都市の公園などにも多く姿を見せるようになっている。（左，上）

PH. G. QUEDENS（左），*BILLE*（上）



モリバトは臆病(おくびょう)だが気性が激しく，よく動く鳥である。速くはないがよく歩き，そのときにはからだを地面に水平にして，頭をたえまなく動かしている。えさを求めて地上におりるとき以外は，木の枝にとまるか，葉の茂ったところに身を潜めている。飛行は速く優雅だが，つばさが風を切る音が騒がしい。モリバトは，その大きさとつばさを飾っている白い帯で，遠くからでも他のハトとは容易に見分けることができる。

日がのぼるころには，モリバトはもう目をさましている。雄は気に入りの木に飛んでいってとまり，くちばしをあけずに「クー クー」と鳴きはじめる。ひっきりなしにくびがふくらみ，頭が動くが，からだはじっとしたままである。1度声をあげると，つづいて3，4度繰り返すが，興奮しているとその調子が速くなる。近くの木々にとまっているモリバトはそれを聞いて集まり，声を合わせて鳴く。

朝8時か9時になると，雄はえさを捜しに出かけるが，雌も抱卵前ならばいっしょに行動する。10時ごろにはもどり，また鳴きはじ

モリバトのひな。かえったばかりのひなは
目も見えず，羽毛もはえていない。
ひとり立ちできるまで，1か月ほど巣にとどまる。
かなり荒いつくりのベッドだが
寝ごこちはよいのだろうか。（右）

PH. A. FATRAS





めるが、朝早くよりは弱い声で、低い調子である。11時を過ぎると水を飲みにいき、その後は茂みに身を潜めて休息する。午後２時か３時には再びえさを捜しに出かけ、夕暮れにはまた「クークー」と鳴き、再び水飲みに出かけてもどると眠りにつく。

一般に、モリバトは気候のよい間はつがいで生活し、群れをつくることはまれである。

繁殖期は春のはじめに始まる。モリバトの鳴き声が騒がしくなるのはこのころである。モリバトの求愛行動は、ハト科の他の鳥と同じである。つまり、雄がすばやく上昇し、つばさをはたはた鳴らし、滑空しつつおりてくるのである。地上では雄は「クークー」と鳴きながら尾羽を立てるかひろげるかして、雌に自分の姿を誇示する。雌がそれに引きつけられると相互整羽が行なわれ、儀式は終わる。

モリバトが巣をつくり始めるのは、４月の終りである。巣を置く場所は地上３～30メートルと高さはまちまちだが、木の幹に近い枝の上で、葉のよく茂っているところがふつうである。かわいた小枝を積んで巣をつくるが、それをひどくまばらに置くだけなので、なかの卵が透けて見える。見かけはいかにももろそうだが、この巣は実際にはどんな風にも耐えられるのである。

モリバトはまた、他の鳥やリスなどがかつてすんでいた巣のなかに小枝を積んで、平らな床をつくって使うこともある。雌は先端が丸く、かなり細長い卵を２個産む。この卵は白くて光沢がある。

父親も子に《授乳》する

抱卵は雌雄が交替で行なう。何か偶発事件があって、巣から追われるようなことにでもなれば、決してもとの巣にはもどらず、卵やかえったばかりのひなを見捨ててしまうことがある。だが危険のないかぎり、雌雄は昼夜交替で、まだ羽毛のはえていないひなをあたためる。ことに寒い季節や雨の降るときなどはいっそうのことである。ひながはじめに与えられる食物は、前に述べた親の嗉嚢から出る《ハトの乳》だが、これは雌も雄も同じように出す。

モリバトは、さまざまな植物の種子を地面で拾い集めて食べる。そのほか穀類や植物の葉、花のつぼみ、若芽なども食べる。コケモモなどの漿果類、ブナの実なども好物である。ごくまれにナメクジやミミズなどの動物を食べることもある。

モリバトのおもな天敵は、猛禽類である。まだ飛べないひなは、テンやヤマネコなどに襲われることもある。しかしモリバトにとってもっとも危険な敵は、その肉を得ようとして追いかける人間であろう。

ヒメモリバト *Columba oenas* も、カワラバト属の１種である。モリバトによく似ているがやや小型で、ヨーロッパでふつうに見られる。背面は灰青色で、くびとつばさに白い斑点がないことでモリバトと区別できる。

フランスではヒメモリバトは留鳥だが、北ヨーロッパにすむものも冬にはフランスに渡ってくる。モリバトよりも人家の付近にやってくることは少なく、森林にすみ、樹洞に巣をつくる。

カワラバト属はハト科のうちもっとも種の多い属で、約50種があり、オーストラリアを除くすべての大陸に分布する。

ヒメモリバト。ハト科カワラバト属。
ヨーロッパの森林にすみ，樹洞に巣をつくる。
しだいに数が少なくなっており
都市の周辺にはほとんど姿を見せない。
PH. G. QUEDENS

ウロコバト *Columba guinea*。
ハト科カワラバト属。
つばさに点々と白い斑がある。
目のまわりの赤い部分も特徴的だ。（右）
PH. Z. F. A.









ドバト。『旧約聖書』ではノアの洪水のとき，オリーブの葉をくわえてきて陸地の存在を教えたのはハトだった。『新約聖書』によれば，キリストは《ハトのように柔和であれ》と遺訓したという。いまでも平和のための会議やスポーツの祭典に際して，ハトをいっせいに放すことがよく行なわれている。 *PH. E. P. S*



カワラバト　*Columba livia*

ハト科カワラバト属の1種で，さまざまな品種がつくられて飼われているドバトの祖先とされている。全長は30センチほど，羽色（うしょく）は灰青色で，首の横にタマムシのような金属光沢がある。背面は白で，つばさには黒い2本の横線が走っている。尾は短くて幅が広く，縁は黒い。

野生のカワラバトは，地中海周辺の全域から西アフリカ，アラビア，西アジア，インド，ヒマラヤまで，広い地域で繁殖する。生息地としては，沿岸地方や岩山を好む。カナリア諸島のランザロート島では，煙の出ている火山の火口でもカワラバトの生息が確認されている。硫黄（いおう）の臭気にもかかわらず，このカワラバトはいたって居心地がよさそうだったという。エジプトでは，ナイル川の両岸の断崖（だんがい）の壁，とくに滝の近くにカワラバトがたくさんすんでいる。インドではもっともふつうに見られる鳥のひとつで，古い建物の壁によく巣をつくっている。

野生のカワラバトの行動は，飼育下のドバトとほとんど変わらないが，カワラバトのほうが速く敏捷（びんしょう）に飛ぶ。ひと足ごとに頭を上げながらよく歩き，飛ぶときにはつばさが風を切る音がする。たいへん高いところまで飛びあがることを好み，多数が群れて空中を大きな円を描いて飛ぶことがよくある。

おもな食物は植物の種子である。ふつうは午前中に2度，午後に1度，食物を捜しにいくが，そのために長距離の移動を余儀なくされることもある。カワラバトは大量にえさを食べるので，農業に大きな損害を与えることがあり，とくに種まきの季節に被害が大きい。だがヨーロッパでは，農業に害を及ぼすハトは，おもに野生化したドバトである。というのも，純粋に野生のカワラバトは，ヨーロッパの田園地方には少ないからである。

カワラバトは，年に少なくとも2度は営巣（えいそう）する。雄は巣づくりに適した場所を見つけるとすぐにそこに陣取り，頭を下げて「クークー」と鳴きはじめる。そして雌がやってくるまで鳴きつづける。雌雄は力を合わせて巣づくりをするが，その巣は小枝とムギワラを積みかさねたもので，中央がわずかにへこんだ皿型である。

卵は細長く，白くなめらかに輝き，1腹に2個が産まれる。雌雄は交替で抱卵（ほうらん）し，17日から18日たつとひながかえる。かえったばかりのひなは目が見えず，からだには黄色っぽい綿毛がまばらにはえている。1か月するとひなは巣を離れ，数日間は親鳥といっしょに暮らしているが，まもなくひとりだちする。いったん形成されたつがいは一方が死ぬまで続き，繁殖期でないときにも，決して離れずにいっしょに生活している。

ヨーロッパの大都会では，よく寺院や駅の構内にたくさんのハトが集くっているのが見られるが，それはカワラバトである。記念物などを白いふんでよごすので，迷惑がられることが多い。



モリバトの親子。
親の愛は鳥類としても変わりはないが
危険が迫ると卵やひなもろとも巣を捨てるという
残酷ママもいる。（99―10，11）
PH. G. QUEDENS

カワラバト。ハト科カワラバト属。
もともと人のいかないような岩場にすんでいたが
古代エジプトのころから飼育化が始まり
ドバトのさまざまな品種がつくられた。（上）
PH. RUSS KINNE-BRUCE COLEMAN LTD.

カワラバトの分布。
いまでは岩場や砂漠地帯だけでなく
大都市にもやってきて，建物の壁に巣をつくる。

ドバト

Columba livia var. *domestica*

ハトの飼育の記録がはじめて歴史にあらわれるのは、紀元前3000年ごろのエジプトにさかのぼる。こんな遠いむかしから、すでにハトが長い飛行に耐えること、方向感覚が発達しているため遠くまで運んでももとの場所へ自力で帰れることが知られていたのである。そして人びとは、ハトのこのような能力を利用して手紙を運ばせた。

古代エジプトだけでなく、古代のインドや中国、ギリシャ、ローマでもハトが飼われ、訓練されたのは、手紙を運ばせるためであった。古い記録には、とくによく仕込まれたハトの飼主に対して支払われた法外な金額が書かれている。またマホメットは、伝書バトの飼育にたいへん興味をもって、自分でも熱心に飼っていたという。

ドバトの始祖はカワラバトといわれているが、両者の特性がかなり異なるので、学者のなかにはカワラバトが唯一の始祖ではないとする者もある。だが多くの場合、ドバトはカワラバトの飼養品種とされている。デンショバトとかイエバトと呼ぶ人もあるが、これは俗称である。

ドバトにはさまざまな品種がつくり出されているが、それらの分類は、ふつう利用目的によって3つに分けている。それは、食用バト、鑑賞用ハト、伝書バトの3つである。

食用バトは、太らせることができ、上等な肉を提供する品種である。ヨーロッパの農園用ハトはその筆頭で、羽色はまだらか、茶、黒、灰色、白のものがある。モンダンと呼ばれる品種は、あしが短く、雄の体重は平均800グラムになる。年に8回卵を産み、16羽のひなを得ることができる。カルノーという品種はモンダンよりもやや小型だが、より多産である。

1000キロの道を帰る伝書バト

鑑賞用ハトには多くの品種があるが、外観あるいは特殊な能力によって、3種類に分けられる。

その第1は鳴き声を楽しむもので、カワラバトから直接改良されたタイコバトや、トランペッターなどがある。これらのハトは、それぞれの品種名につけられた楽器に似た音を出す。タイコバトの市場価値は、音を出す頻度と持続時間によって決まる。アルタンブールやザクセンで生産される優秀なタイコバトは、えさを食べている間さえも休まずに、たえず太鼓のような音を出しつづける。トランペッターのほうは、鳴き声が抑揚のあるつんざくような音である。

第2は、飛行の巧みさを見て楽しむもので、曲芸バトなどとも呼ばれる。インドでつくられて改良されたもので、ごく高いところまで飛びあがり、飛びながらアクロバットのよう



な方向転換をしたり、宙返りをしたりするという特技をもつ。

第3は、その姿の美しさを見て楽しむハトである。これには、鳴くときにのどを大きくふくらませるもの、羽毛（うもう）が巻いているもの、あしが長い羽毛のふさでおおわれているもの、尾が扇のようにひろがるクジャクバト、肩の羽毛がえりを立てたようになっているジャコビンなどがある。

伝書バトは外観はじみで、野生のカワラバトにとてもよく似ている。長い間、注意深く人為淘汰を行なった結果、その特性を最大限に発達させることができたのである。よい伝書バトはやや小柄で、くちばしが短く、鋭い目をしていて、あしは細く、胸部は幅が広く厚みがあり、胸筋がよく発達している。つばさは長いが、羽毛は飛ぶときに空気の抵抗を小さくするため、からだにぴったりとついてなめらかである。

伝書バトの代表的な品種としては、リエージュのものとアントワープのものを交雑して得られた、ベルギーのものが有名である。

伝書バトの訓練は、ひながひとり立ちするとすぐに始めれば、じゅうぶんな飛行耐久力を養うことができる。若いハトを鳥かごに入れて、はじめは巣からほんの少し離れたところ、ついでだんだんと遠くへつれていき、数時間絶食させておいてから夕暮れに放す。ハトは本能に導かれ、ねぐらとえさを求めて、自分が育ったところへと帰るのである。

伝書バトが確実にもどってくるようにするには、300キロ以上離れたところからは飛ばさないことである。もちろんなかには並みはずれた能力をもつものもあって、1000キロ以上離れたところから難なくもどるものもある。優秀な伝書バトは、天気がよければ、高度1000メートルのところを平均時速70キロで飛ぶ。

伝書バトを飼育するには、鳩舎をつくる必要がある。鳩舎は多数の巣房に区切り、それぞれの巣房ごとに巣皿を置く。この鳩舎は、





ドバト。
神社仏閣の境内や駅などにたくさん群れて
人の手からえさをもらったりしている。
ふえすぎて困っているところも多いが
平和の象徴を殺すわけにもいかないとか。（左）
PH. FREDERIC JACANA

クジャクバト。
人間がつくりだしたドバトの品種のひとつで
扇のようにひろげることのできる尾羽をもち
鑑賞用に飼育されている。（上）
撮影 内山 晟

ドバト。ハトはいつでも水を大量に必要とする。
飲み水を求めて遠くまで出かけていくこともあり
公園の池や噴水に集まって
水を飲んだり水浴びをしたりする。（下）
PH. BILLE



ジャコビン。
鑑賞用につくりだしたドバトの品種のひとつ。
コートのえりを立てたような羽飾りが
フランス革命時代の服装に似ている。
撮影 [illegible]

ハトが飛びたってすぐ外に出られるように、直接屋外と通じていなければならないので、屋上や庭に設けられる。えさとしてトウモロコシ、ダイズ、塩土などを与える。またいつも水を飲めるようにしておく必要がある。

ドバトが繁殖できるようになるのは、生まれて5か月ほどしてからである。一雌一雄制をきびしく守り、年に6回産卵する。1腹の卵数は2個。約18日間の抱卵で孵化する。ハト科のすべての鳥と同じように、ひなは親鳥の分泌する《ハトの乳》で育てられる。ついで、親鳥があらかじめ自分の嗉嚢（そのう）で柔らかくしたえさを与えられる。ひなが巣にとどまる期間は長く、風切羽（かざきりばね）がじゅうぶんに発達して飛べるようになるまで、すなわち約1か月は巣を離れない。

ドバトの飼育下での平均寿命は9年だが、15年以上も生きるものもある。

リョコウバト

Ectopistes migratorius

ハト科リョコウバト属の鳥。全長は約40センチ。羽色は全体に灰青色で、背面は紫色の光沢があり、腹面には褐色の光沢がある。かつて北アメリカ大陸に非常にたくさん生息していたが、人間が食用にするため容赦なく狩りとったので絶滅し、今では1羽も残っていない。最後の個体は、アメリカ合衆国シンシナチの動物園に飼われていたもので、1914年に死んだ。

リョコウバトが生息していた地域は、北はカナダ南部から南はメキシコ湾沿岸まで、西はロッキー山脈から東は大西洋岸までの広い範囲であった。その名の示すとおり、リョコウバトは毎年ほぼ同じ道を通って長距離の渡りを行なった。

オーデュボン（**Audubon**, 1780—1851）の記述によれば、リョコウバトは強いつばさを使って非常に速く飛ぶ鳥であって、3月か4月には北部の森林にやってくる。1か所に定住することはなく、ほとんどいつでも移動している。驚くほどよい目を持っているので、上空を飛んでいても地上のえさを容易に見つけることができる。荒地を横切るときは高いところを飛び、えさのたくさんありそうな森林地帯にくるとおりてくる。

リョコウバトは非常に多数が集まって営巣することがよくあり、1本の木に50以上もの巣が見つかったこともあった。1腹の卵数は1個だけで、卵は白い。若鳥は自分でえさを見つけられるようになると親から離れ、同じ年齢のハトだけで群れをなす。

オーデュボンが観察したころには、リョコウバトはとてもたくさん生息していて、その群れが渡るときには耳を聾するばかりの羽音をたて、数日間とだえることなく空をおおったという。そのためリョコウバトの渡りのときには、その周辺の住民はハトの肉だけを食物としていたほどであった。

捕獲手段が改良され、しだいに大殺戮が行なわれるようになった。はじめは銃で撃ったり棒でたたき落としたりしていたのが、おとりと網を使うようになり、スポーツとしての数千、数万という単位での殺戮も行なわれた。シーズンには何百トンものハトの死骸が貨車で出荷されていた。

あれほど広い地域にたくさん生息していたリョコウバトが絶滅したという事実は、人間の自然破壊の力の大きさを考えさせる。



リョコウバト。ハト科リョコウバト属。
かつて北アメリカに無数に生息し
渡りのときは何時間も，何日も空をおおったが
乱獲のため20世紀はじめに絶滅した。
いまは剥製と絵が残っているだけである。
PH. LAROUSSE



ロマーニア。ドバトの品種のひとつ。
あしをおおっている羽毛が美しいが
イタリアでおもに飼われている食用バトで
大きなものは1200グラムにもなるという。
PH. L. GAGGERO





コキジバト　*Streptopelia turtur*

ハト科キジバト属の1種。全長は27～30センチである。羽色は全体に褐色で，背面には濃い茶色の斑紋があり，くびの両側には黒と白の縞がある。尾はかなり長く，白い縁どりがある。

ヨーロッパではスカンジナビア，スコットランド，アイルランド最北部を除く全域にすみ，北アフリカおよび西アジアにもいる。夏の終りに南方に渡るが，渡りの経路と越冬地はまだ正確には知られていない。ヨーロッパには4月に小さな群れ単位でやってきて，5月から6月に営巣する。営巣の場所は，まばらな木立ちのなかとか，森のはずれ，やぶのなか，垣根などである。

姿が優雅であり，性質も穏やかであるために，コキジバトは古くから詩人たちに歌われてきた。また雌雄がたがいに示す愛情から，愛のシンボルともされている。

コキジバトは歩行も飛行もうまい。ハト科の他の鳥ほど音をたてずに，たいへん複雑な

コキジバト。ハト科キジバト属。
ヨーロッパでふつうに見られる野生バト。
繁殖力は弱く，年に1回しか産卵せず
1腹の卵数はふつう2個である。（上）

PH. L. FATRAS



コキジバトの巣と卵。
巣は小枝を積んで皿型にしただけのもので
下からなかの卵が透けて見える。(左下)
PH. A. FATRAS

コキジバトの巣立ちびな。
ハトは速く敏捷に飛びまわるので
ほとんどの天敵から身を守ることができるが
ひなは猛禽のえじきとなることがある。
PH. A. FATRAS

飛び方をすることができる。猛禽に追われると、密生した葉むらに逃げこみ，敵の手をのがれる。

学名の *turtur* は，この鳥の鳴き声をかなりよく写している。コキジバトは「トゥルトゥル」と単調に鳴き，これを数回繰り返す。鳴くときはくびをふくらまし，頭をわずかに下げる。繁殖期になると，雄が雌を呼ぶのでこの鳴き声がいっそう高まる。

天気が悪くなると，コキジバトは鳴きやむ。晴天のときには，休まずに25分から30分も鳴きつづける。雄は繁殖期の間，雌をひきつけるために，空中に斜めに飛びあがって羽ばたき，ゆっくりともとのところにもどるという動作を，何度も繰り返す。

コキジバトはさまざまな植物の種子を食べているが，ナメクジやカタツムリなども少々食べる。農作物の種子を食べてしまうこともあるが，それ以上に雑草の種子を大量に食べるので，農業にとってコキジバトはたいへん有用な鳥である。



コキジバト。
ヨーロッパでは春に姿を現わす夏鳥である。
林縁部や灌木の茂みなどに営巣し
冬にはアフリカなどに渡って越冬する。（上）
PH. L. GAGGERO

コキジバトは，かなり規則正しい生活をする。夜があけるとすぐにねぐらを出て食物を捜しにいき，朝10時ごろもどってくる。午後3時ごろには再びつがいで，あるいは小さな群れでえさを求めて出ていく。午後5時ごろまでは出かけたままである。また朝11時ごろと夕方に水を飲みにいく。にごりのない冷たい水しか飲まないため，水を求めてかなり遠くまでいくこともある。

繁殖期は4月末か5月はじめに始まり，7月まで続く。つがいによっては，年に2回営巣することもある。雌雄は力を合わせて巣をつくるが，それはふつう高さ2～4メートルのやぶか灌木（かんぼく）のなかに，小枝を乱雑に積みあげたものである。下から見上げると，巣のなかにある卵が透けて見える。1腹の卵数は2個。雌雄は交替で抱卵し，協力して育雛（いくすう）する。ひなは18日間巣にとどまる。9月になると越冬地へと出発する。

コキジバトの飛行は速く，敏捷であるため，天敵である猛禽類からはほとんどの場合逃げることができる。しかしひなの場合は，しばしばそのえじきとなる。

キジバト

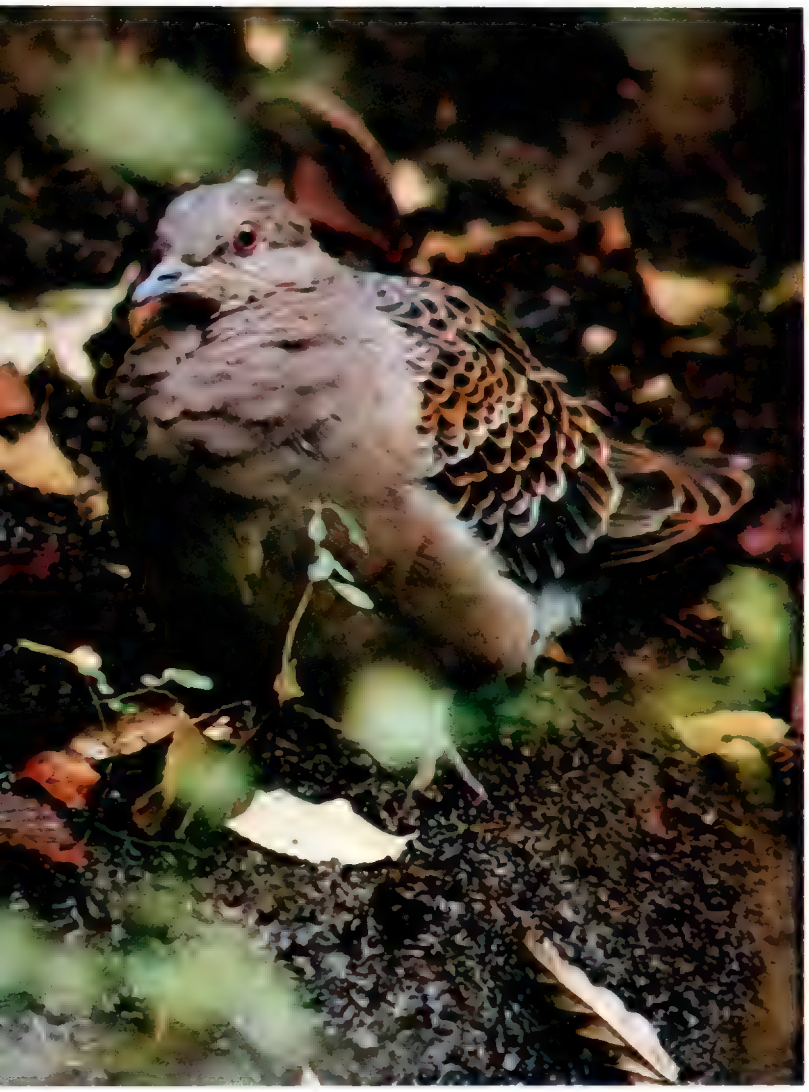
Streptopelia orientalis

アジアにはヨーロッパのコキジバトにかわって，より大型のキジバトがすみ，日本，アムール地方を北限として，台湾，中国，インド北部まで分布する。日本では各地でもっともふつうに見られる鳥のひとつで，俗にヤマバトと呼ばれる。南方系の鳥で，日本でも南にいくほど多いようである。

一般に平地に分布し，採食地となる農地に接した灌木林，雑木林に好んですむが，近年では急増するハンターに追われて，都会の公園や庭園の植込みにはいりこんできている。これは，戦後20数年で都市の樹木がじゅうぶんに茂ってきたこと，市民がえさ台を準備するなど鳥を愛するようになったことにもよるようだ。また都市部では，タカ類にねらわれる危険も少ない。キジバトは人や外敵の危険を知るのに敏であり，安全とわかれば人にもなれるが，都会のネコにはときに不覚をとる。そして，もともと林の鳥なのだが，人家の屋根にとまったり，人通りの少ないときにはアスファルトの道路におりたりしはじめている。

キジバトは一般に留鳥（りゅうちょう）で，暑い夏でも都会の緑地や郊外の雑木林につがいでとどまり，秋になると幼鳥をまじえて移動が見られる。また本来は平地の鳥だが，好物の木の実がある山地の林にもはいる。標高2400メートルの富士スバルライン五合目付近や，さらに上方の木のない高山帯でも見かけることがある。こうして平地の鳥であるキジバトが，いまや日本でいちばんの高山にもすむ鳥となった。

一方，南の沖縄では，その夏の暑さにも適応して留鳥となっており，とくに南沖縄の宮古，石垣，西表（いりおもて）などではもっとも多い鳥のひとつで，周辺の離島では密集状態で生息し，あるいはねぐらとしている。これはハブや人からの安全ということもあるかもしれない。西表島に近い鳩離島（はとばなれじま）など木のない小島では，ススキやドばえの草のなかにコロニー（集団営巣地）状に集まっている。はるか西の孤島，沖の神島でもキジバトの群集が見られる。このように，留鳥のキジバトにも，太平洋の諸島に広く拡散分布したハト族の開拓の血が宿っているのである。



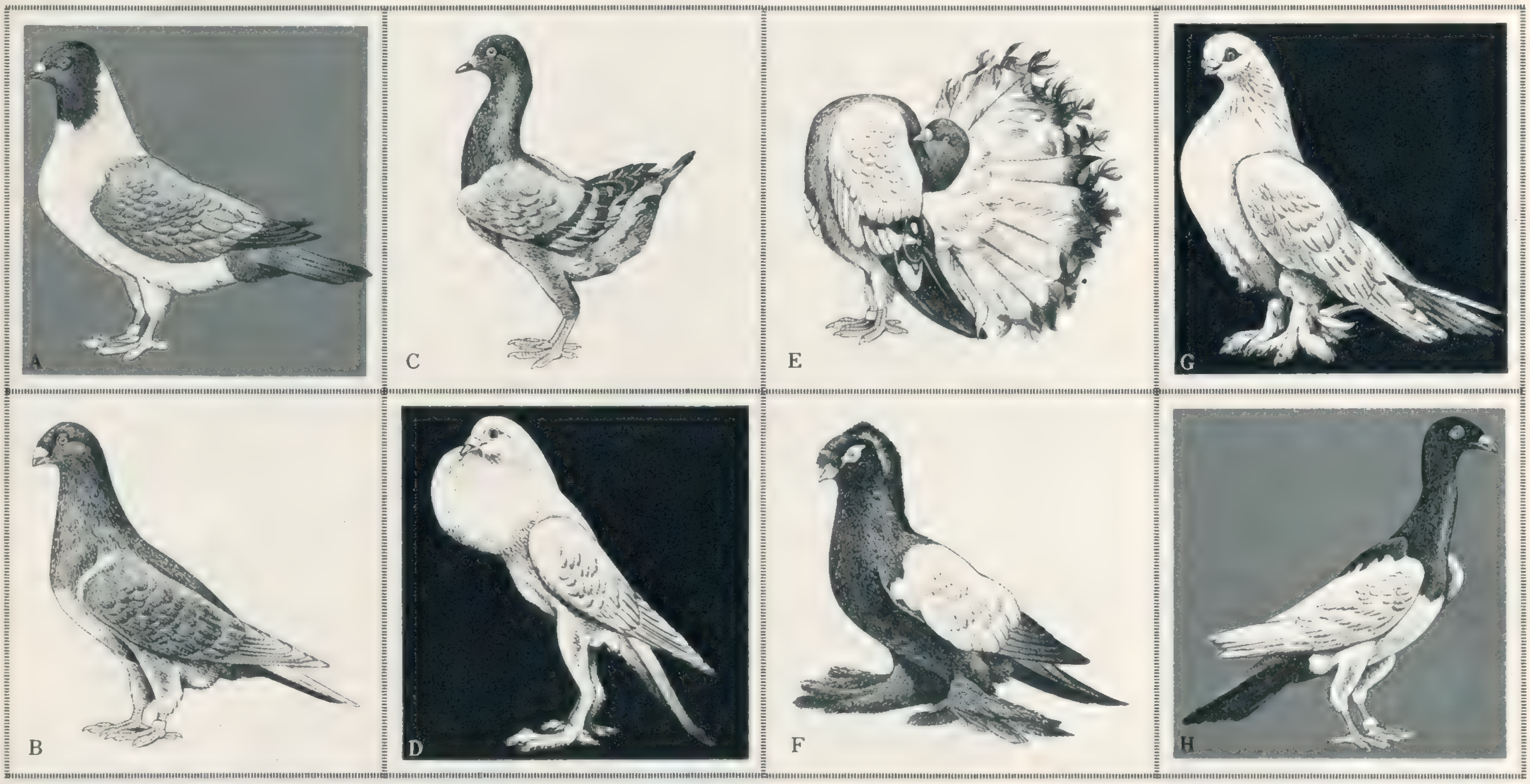
キジバト。ヤマバトの俗名で親しまれ
デデポーポーという特有の鳴き声は
日本各地で聞くことができる。
猟鳥として，ハンターにねらわれている。（下）
撮影　笠原昭夫

ドバトの代表的品種

黒田長久

人間のつくり出したさまざまなドバトの品種の一部を，絵で示した。その形だけを見たのでは，とても同じ種とは思えないが，遺伝学的には単なる突然変異の積みかさねにすぎないのである。　　え　木村しゅうじ

A．ストラッサー　ドイツ原産の食用バト
B．アントワープ　ベルギー原産の伝書バト
C．マルテス　イタリア原産の鑑賞用ハト（姿）
D．パウター　イギリス原産の鑑賞用ハト（姿）
E．アンテール　ドイツ原産の鑑賞用ハト（姿）
F．トランペッター　オランダ原産の鑑賞用ハト（鳴き声）
G．テュメル　ドイツ原産の鑑賞用ハト（飛び方）
H．モンドリバト　ドイツ原産の鑑賞用ハト（飛び方）



キジバトの生態

野沢進之輔

古くから親しまれてきた，東くめ作詞の『鳩ぽっぽ』にしても，文部省唱歌の『鳩』にしても，詩の内容はお寺などにいるドバトについて書かれている。このなかでおもしろいのは，両方の唱歌とも鳴き声が「鳩ぽっぽ」となっていることで，ドバトは「ポッポ」とは鳴かない。たぶんこの鳴き声だけは，キジバト（ヤマバトとも呼ばれている）の鳴き声と混同しているのではないかと思う。たとえば長野市にある善光寺を見ても，建物のまわりにはドバトが何千と群らがっており，そのまわりの境内の林には，キジバトが生息しているので，両者を混同しやすい。

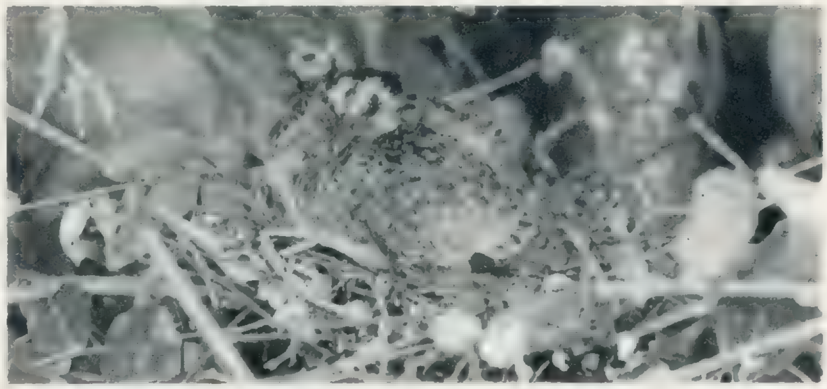
2交替で24時間抱卵

キジバトは，デデポッポーの鳴き声で親しまれ，日本各地で見られる。市街地の雑踏のなかから，標高約1500メートルの亜高山の樹林まで繁殖している。

キジバトの雌雄は，外形では見分けがつかない。大きさも，首にある1センチくらいの幅の縞模様も同じである。このため観察するときには，巣の上にペンキのはいった小さなかんをぶらさげておいて，キジバトが巣にはいったときひもを引いてペンキを落とし，羽毛（うもう）にマークをつけ，産卵や交尾の観察によって雌雄の区別をつけた。

キジバトの繁殖期間は長い。2月の中旬を過ぎると，とぎれとぎれではあるが鳴きはじめる。ウグイスやシジュウカラのような，さえずりと地鳴きの区別ははっきりしない。続いて，早いものは3月中旬から繁殖が始まる。おそいものでは11月初旬までひなが見られることがあるが，繁殖の最盛期は4～8月の間である。このなかで，1年に同一の親で2回以上は繁殖すると思われるが，はっきりした回数は不明である。

巣の場所を決めるときに，雄は木の茂みの数か所で，グッー，グッーというような声で鳴く。その場所へ，巣材を少し運ぶこともある。そうすると雌はその場所へ飛んでいって，しばらくうずくまる。こんなことが数日間ほど続けられたのち，そのうちの1か所に，雄は巣材を運びはじめる。


キジバトの巣と孵化後10日めのひな　　撮影　筆者

巣はふつう樹上につくる。5～30センチくらいの小枝を組みあわせて，皿状の形につくりあげる。ときには下から卵が透けて見えることもある。巣の材料は地上で拾ったり，ケヤキなどの木から直接枯れ枝をくちばしで折ったりする。雄が巣材を運び，雌は巣のなかにいてせっせと巣をつくる。近くに工事現場があれば針金の切れ端も使う。新しく巣をつくる場合でも，4日もあればできてしまう。

卵は2個。1卵めから抱きはじめる。抱卵（ほうらん）は雌雄とも行なうが，交替は1日2回だけである。午前8～11時の間に雌から雄に代わり，午後3～5時の間に雄から雌に代わる。だから雄は昼間平均8時間，雌は夜を中心に平均16時間も抱きっぱなしである。途中で巣から離れることは，産卵日以外はほとんどない。その間飲まず食わずである。保温がきかない雑な巣を思い浮かべれば，1日24時間抱卵もうなずける。

交替するときは，必ず一方の親が巣のふちや営巣（えいそう）している木まできてから，もう一方の親が飛びだした。だからこの交替は，ほとんど30秒ぐらいですんでしまい，長くても2分ぐらいであった。

あるとき，夕方になっても雌が帰って

——→ *

生きものの世界への疑問 4

自然淘汰の役割

日高敏隆

さて、種というものがそれほどがっちりしたワクをもち、容易には変化しないものであるとすると、ここで重大な疑問が出てくる。それは、それなら進化はどのようにして起こり得るか？　ということである。

ダーウィンがかれの進化論を述べた本は、有名な『種の起原』である。いつも指摘されるとおり、進化とは新しい種の生成の問題だとダーウィンが考えていたことは正しかった。まさに進化とは、それまでいた種から、それまでにはいなかった新しい種ができることによって起こったのである。

しかし、これまで3回にわたって述べたように、種というものは、われわれが今まで想像していたよりもはるかに不変性の強いものである。変わらないものが、どのようにして変わって、新しい種を生みだすことができたのであろうか？

ダーウィンの素朴な考えによると、同じ種のなかにも個体によって、さまざまな変異があり、それが自然淘汰（自然選択）によってふるわれて、よりよく適応したものが生き残って、やがては新しい種になっていくという。

この考え方はたいへんわかりやすいので、急速に人びとの思想のなかに浸みこんでいった。というより，その時代の人びとの思想がそのようになっていたから、ダーウィンの考え方が急速に浸透していったのかもしれない。その点については、いずれ述べるとして、とにかく問題はダーウィンの考えたほど簡単ではなかったような気がする。

変異を起こすのは少数派

まず、むかしからいわれているとおり、自然淘汰というものは、ダーウィンが想像したのとは逆の作用をしているように思えるのである。

かれの考えによれば、自然淘汰は、より適応した変異を生き残らせることによって種を変化させるように働くものとされている。ところが実際にはそうでない。確かにどの生物でも、変異はたえず起こっている。だれでも知っているとおり、その変異には、遺伝しない変異と、子孫に遺伝する変異とがあり、進化のうえで意味をもつと考えられるのは、後者すなわち〝突然変異〟である。この突然変異が一定の比率でたえず起こっていることは、今でははっきりわかっている。

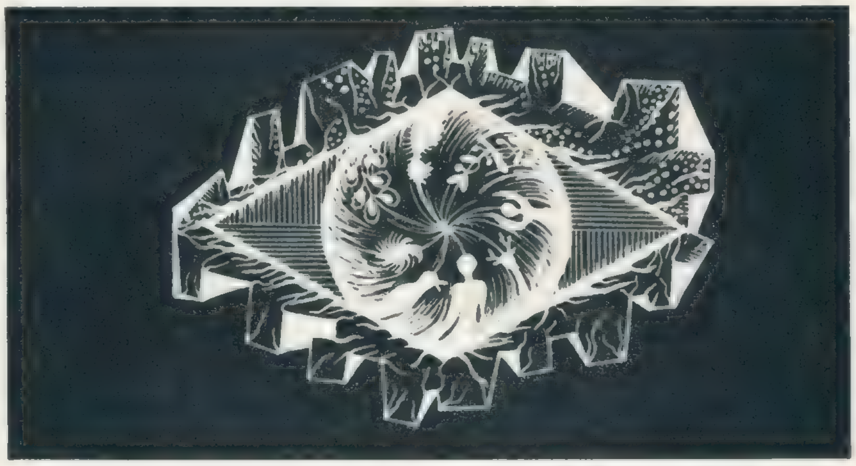
ところが、こうして突然変異を起こした個体は、からだが不具であったり、生活力が低かったり、雌の目にとまらなかったり、雄に受けいれられなかったりして、結局は子孫を残さずに死んでしまうのがふつうである。

たとえば、ヒョウモンチョウの1種で西ドイツのマグヌス（D. Magnus）が研究したところによると、このチョウの雌にはヴァレシナ型という型がある。この型は突然変異で生じたものと思われるが、ふつうの型（パフィア型）にくらべて、著しく黒っぽい。このチョウの雄は、雌の翅の表面のオレンジ色と、裏面の黒っぽい色とが、飛行の際の翅の動きに伴い、パッパッと交替するフラッシュによって雌を見つける。表面も裏面も黒ずんだヴァレシナ型の雌は、ほとんどこのフラッシュを生ずることがなく、したがって、ほとんど雄の注意を引くことがない。その結果子孫をほとんど残さずに死んでしまう。

ヴァレシナ型が突然変異で生じたものとすると、現在でもこの型の突然変異は一定の比率で生まれてきているだろう、と考えられる。けれど、上のようなことになっているので、この突然変異はたえず自然淘汰によってふるい去られており、ひろがっていくことはない。したがって、自然淘汰はこの変異を〝はげまして〟新しい種の生成に向かわせるのでなく、このような変わりものを切り捨てて、種を変化しないように保つ働きをしているのである。

それはこの変異がより適応していなかったからだろうか？　どうもそうとは考えられない。というのは、ごくたまに、性衝動の異常に高い雄が、ヴァレシナ型の雌のごく弱いフラッシュに関心をもち、求愛して交尾し、受精卵を産ませることがあるからだ。そうなると、この型の卵はちゃんと孵化し、幼虫もすくすく成長する。生活力が劣るようなことはないらしい。しかも、この型は遺伝的に優性なので、子孫の雌は全部ヴァレシナ型になる。こうして、かなりの数のヴァレシナ型がまた生じることになるのだが、その大部分は子孫を残さずに死んでしま





カラーページ解説

* ——————•

こないことがあった。雌はじっと暗くなっても卵を抱きつづけていた。それから2日間は、ときどき雄は抱卵していたが、雌が帰ってこないのでその巣を捨ててしまった。

市街地の街路樹にも営巣

卵を抱きはじめてから15～16日でひながかえる。えさを欲しがるときは、まだ羽毛のはえていないつばさを動かし、小さな声でピーピーと鳴く。

ひながえさをもらうときは、親の口のなかへくちばしを入れる。親は首を上下に振りながら、嗉嚢（そのう）にためてあるえさをもどすようにしてひなに与える。ひなは2羽が同時に親の口にくちばしをつっこむ。1羽だけが親の口にくちばしを入れるときでも、すぐその後に他の1羽が、争うようにえさをもらう。見ていると親は苦しそうに思える。

親が保温のためひなを抱いているときには、抱きながら1日10数回えさを与える。ひなが大きくなると、親は1日に3，4回巣に飛んできてえさを与えるだけである。えさをもらったばかりのひなの嗉嚢は、破れんばかりにぱんぱんにつまっている。えさはすべて植物質で、季節によってムギだったり豆だったり、そのときどきの雑草の種子だったりする。繁殖期間の長いことも、えさが多様なためであろう。

最近、市街地のまん中の街路樹や、都内の公園にキジバトが巣をかけたことが、ニュースになっている。長野市内で見た巣も、自動車がひっきりなしに通る大通りの街路樹にかけたもので、すぐ下を人が通っていた。このわけはいろいろ考えられるが、先に述べたようなえさの与えかたによるものと思う。えさはかなり遠くまでとりにいける。強いつばさで、ときには数キロ離れたところまでえさをとりにいく。えさをとる場所はだいたい決まっている。巣のまわりでは，ほとんどえさをとらなかった。

15～16日たつと、ひなは巣立つ。観察していた巣では、夕方、ひなの1羽がつばさをバタバタさせながら枝伝いに巣から出てきた。続いてもう1羽が巣から出た。飛びたったという感じではなかった。その夜は、巣のある木にねぐらをとった。次の日からは、巣のまわりの木のあいだを、少しずつ飛びまわっていた。その後10日間ぐらいは親から給餌を受けた。ひなが地上に降りてえさを食べはじめたのは、巣立ち後7日めくらいであ



うので、この型はいつも少数のままだ。

この型は雄に発見されにくいのだから、やはり適応していないのだ、と考えることもできる。だが、もしそう考えた場合、どうなったら〝適応している〟ことになるのだろう？　雄に発見されやすいのが適応していることになるとすると、ヴァレシナ型よりもともとの型の雌のほうがより適応していることは確かである。そうなると、ヴァレシナ型はいつも淘汰されて消滅する運命にあるわけで，結局，種はもとのままに維持されることになる。

では、もとの型よりもっと雄に発見されやすい変異はないものだろうか？　もし，表面のオレンジ色がもっと鮮明で，黒い斑点などまったくなく，裏は今の型に見られる銀色や淡色の部分などがなくなって，まっ黒になったら，その型はきっとずっとよく雄を引きつけるだろうと考えられる。なぜかというと，マグヌスの実験では，ほんものの雌の翅より，一面オレンジ色と黒の色紙を使ったときのほうが，雄がたくさんやってきたからである。したがって，もしこのような突然変異が生じたなら，その型は急速に多くの子孫を残し，種の形質はそちらへ変わっていくだろうと想像される。

けれど，なぜだかしらないが，そのような変異は見つからないらしい。そしてまた，もしそのような変異が現われたら，今までの型の雌が雄を引きつけなくなるわけではないだろう。やはり雄は，近くにもとの型の雌があれば，すぐそれを見つけて交尾してしまうだろう。新しい型はそうやたらにふえていかないかもしれない。

妥協が中庸を選ばせる

そのうえ，自然淘汰というのは，雄に見つかりやすいかどうかという点だけについて行なわれているのではない。敵との関係，太陽熱を吸収あるいは反射して体温を調節する能力，そのほかいろいろな面で自然淘汰が働いている。翅の表面が一面オレンジでピカピカ光ったら，さぞかし雄の目にはつくだろう。けれど，そのような色の翅は太陽熱をみな反射してしまうだろうから，すこし気温が低いときは体温をあげることができず，したがってなかなか飛びたてないかもしれない。すると，飛ぶことに伴って生じる色彩のフラッシュも生じないことになるから，雄に見つかる可能性もなくなってしまうかもしれない。

あるいは，そのように目だつ雌は，敵の目にもつきやすく，すぐに食べられてしまうかもしれない。現在の型の翅にあるヒョウのまだらのような黒い斑紋は，チョウの姿をばらばらに見せることによって，効果的な保護色になっているのかもしれないのだ。

マグヌスの一連の実験の結果から，かれが強調していることは，実在する雌は雄にとって決して〝最適〟または〝最高〟の刺激ではないということだ。雌の姿や色は，いま述べたように，体温調節とか敵の目をくらますことどか，生きていくために必要な，実にさまざまな要求を満たす，いわば妥協の産物なのだ。

そのどれかだけをとくに〝改良〟すると，ほかの点で矛盾がでてくる。ヴァレシナ型は，おそらく敵の目につかないという点では，もとの型より〝改良〟されているかもしれない。けれどその結果，同じ種の雄の目にもつかなくなってしまうので，淘汰はこれをふるい捨ててしまうのだ。

このようにみてくると，自然淘汰は，つねにどちらか一方へかたよりすぎたものを切り捨てて，もとのままの姿が維持されるように働いているように思えてくる。

自然淘汰は，多少ひよわな個体とか生活力の小さい個体をふるい去り，より強い，じょうぶな個体を残すことによって，その種をより生活力の強いものに進化させていくということもいわれる。けれど，それは必ずしもそうでないらしい。そのような個体が〝淘汰〟されることによって，その種の〝人口〟（個体数）がほぼ一定に保たれ，その結果，その種が今までの食物や生活様式を変えずにすむ，つまり変化させないという効果のほうが大きいようにも思えるのだ。

最大のなぞは新種の誕生

人間の場合，生まれる赤ん坊がむかしより大きくなったといわれる。すると，人間の赤ん坊は今後だんだん大きくじょうぶになっていくようにも考えられる。ところが，ある研究によると，生まれたばかりのとき，あまり大きすぎる赤ん坊の死亡率は，小さすぎる赤ん坊のそれと同じくらい高いという。これも一種の自然淘汰だと考えれば，自然淘汰は人間の新生児の大きさを一定の範囲のなかに保つ働きをしていこそすれ，決して新生児が大きくなるような作用は果たしていないことになる。

こういう例はいくらでもあげることができる。そういうことを見ていくと，自然淘汰の果たしている役割について，もう一度考えなおしてみなくてはならなくなる。もちろん，そのような批判はむかしからある。今，われわれが感じることは，そのような事実をもう一度じっくり検討しなおしてみる必要があることである。というのは，いうまでもないことだが，種の変化あるいは新しい種の誕生とは地球の歴史のうえで確実に起こったことであって，それを疑うことはできないからである。■　（東京農工大学教授）

イラスト・重延瓔子

カラーページ解説

る。親は次の繁殖の準備を，ひなの巣立ちと同時に始めたが，次の巣づくり，抱卵と進むなかで前のひなへの給餌を続けたのは，雄だけであった。

ハトの円舞は防衛行動

巣のまわりに侵入してきた他のキジバトに対しては，頭を上下に振って威嚇をする。このときはクックックッと鋭く鳴き，相手のからだの上に飛びかかっていく。この行動は雄だけに見られた。抱卵中に他のキジバトが近づいたとき，親は巣から出て追いはらうことはなかった。

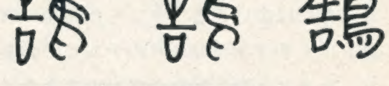
このほか防衛行動のひとつと思われるが，キジバト特有の行動として，円舞がある。これは，空中高く舞いあがり，滑空しながら円を描く行動である。ちょっと見ると，タカを小型にしたようにも感じられる。円舞するキジバトがいると，すぐ近くに巣があることがわかる。

円舞をするのは，他のキジバトが巣の近くに侵入したとき，隣接してすむキジバトが円舞したとき，さらに争いが終わったのちなのである。これらから，円舞はテリトリー（なわ張り）の防衛と深い関係があると思われる。円舞をするのは，すべて雄だけであった。■

（長野県更埴市屋代小学校教諭）

漢字のふるさと　70

藤堂明保



鵠（ハクチョウ）　日本の古語ではクグイといい，今の北京語では天鵝という。コウノトリは漢語では鶴と呼んだので，鵠とは別である。

鵠という字は「鳥＋音符告」からなっているが，べつに告（つげる）とは関係ない。漢語で白髪の頭を「皓首」と呼んだが，その皓（しろい）と同系のことばである。白髪のことをまた「鵠髪」ともいった。だから鵠とは「白い鳥」，つまりハクチョウのことであることは，疑えない。「鴻鵠」と並べた場合は，「おおがも」と「はくちょう」という意味で，渡り鳥のうち，とくに大型のものをさしたのだ。紀元前３世紀に，陳勝がひそかに秦の始皇帝を倒そうという大志を抱いた。百姓仲間がその大言壮語を笑うと彼は「燕雀（小鳥ども），いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや」とうそぶいたという。白鳥は昔から大鳥の代表だった。■



ペット相談室

担当 小森 厚



ふえすぎたハツカネズミ

〈問〉 ハツカネズミがふえすぎて困っています。昨年5月ごろ，つがいを買い求めましたところ，短期間のうちに32匹にもなってしまいました。知人や友人たちにも声をかけてみましたが，「ほしい」という人は出てきません。

ハツカネズミを買った店にも，「タダでもいいから引きとってもらえないだろうか」と話しましたが，よい返事は返ってきませんでした。なんとか，よい方法で処分することはできないでしょうか。

（東京都杉並区・北村千早・画家）

〈答〉 動物園はこうしたペットの処分で，ときどき相談を受けることがあります。小さなときに買ったものが成長して大きくなりすぎたからとか，引越しをするが新しい家には連れていけないのでなんとかしてほしいとか，ひどいのになると，夏のはじめに飼いはじめたが，冬になって家を閉めきるようになったら，臭くてかなわないので引きとってくれないか，などといった虫のよい話を持ちこんでくる人もいます。



しかし，たいていの場合，動物園ではこれらのペットを引き受ける余裕はないものです。とくに，それが家畜や家禽である場合は，伝染病のこともあって引き取りを断わることが多いのです。ただし，引きとった動物をどう処分しようと，それはまったく動物園の自由だということならば，少し話は違ってきます。そういうケースでは，その動物が家畜・家禽などの生産動物である場合は，〝ペット〟としてではなく，元来の〝生産動物〟としての用途にもどすことを意味しているわけです。

しかし実際には，ペットとしてかわいがっていた動物を単なる生産動物として考えなおすということは，飼主として，きわめてむずかしいことでしょう。他人が見れば単なるアヒルであっても，飼主にしてみれば，かわいい「ダックちゃん」であって，別れるとなれば涙も出てくるのです。それを，「卵と肉としてしか考えるな」というのは，いかにも残酷なことです。

ペットとは，もともとそういうものです。それは個人の愛情の対象であって，その価値は飼主にしかわからないものなのです。

しかし，そこで考えていただきたいのは，どのようなペットでも飼主の手を離れたとき，ペットとしての価値――飼主にしかわからない価値――が，ほとんどなくなってしまうということです。それでもなお，その価値を一般に通用させようとすることは，社会にとって迷惑でしかないということでもあります。ちょっと考えると残酷きわまりない考えでも，ペットを飼う人はそれも覚悟していただかなければなりません。

殺すにしのびないからといって，遠くへ連れていって放したイヌが野犬となり，やがて子孫をどんどんふやすようになります。いま，全国の山野で野犬たちがいかにすさまじい勢いで野生動物を殺し，自然破壊のひとつの有力な原因になっているかを考えたとき，個人の誤れるペット観が，いかに社会に迷惑をかけているかがわかるはずです。逆にいえば，社会に対して責任を負える人だけにペットを飼うことが許されている，ということでもあります。



以上，ご質問に対して直接関係ない問題もありましたが，ペットを飼う前提としてみなさんにぜひ考えておいていただきたいので，とくに書いておきました。

さて，おたずねはハツカネズミのことですが，ハツカネズミはもともとよくふえることに目をつけて，実験動物として開発されたものです。きちんと飼えばかならずふえます。つまり，きちんと飼うということは，生産動物として飼っていることになるからです。ですから，実験動物をペットとして飼うためには，きちんと飼わないことが必要になってきます。やたらに子を産めないような状態にして飼わなければいけないというわけなのです。



また，よくふえる状態で飼ったときには，そのハツカネズミを生産動物として考えることも必要です。ひところはやった「趣味と実益を兼ねた」動物として考えるのもよいでしょう。ただしここでいう〝実益〟とは，つねに金銭になるとばかりはかぎりません。

たとえば，実験動物の取扱業者とうまく連携がとれれば，ふえた分が売れることもあるでしょう。またハツカネズミは動物園でよくえさとして使われています。ヘビ，トカゲなどの爬虫類のほか，フクロウ，コウノトリなどの鳥類でも，ハツカネズミやラッテなどを与えることによって繁殖率を高められることもあります。ですから「えさとして使ってほしい」と申し込めば，動物園が引き受けることもあるでしょう。

ふえすぎたハツカネズミは，ネズミとしての命はなくなっても，他の動物たちの血や肉となって生きているのだ，といった考え方を持つことが，ひとつの問題解決法になるのではないでしょうか。■

（多摩動物公園飼育課係長）



画面に出ぬ人にお願い

新聞，雑誌，テレビなどで動物や自然保護の問題がよく取りあげられるようになったのはよいことです。くだらない歌謡ショーやドラマばかりのテレビの画面に，ときどき野生動物の姿が出てきたりすると，わたしなどはほっとします。それが，「これこそ世界の秘境だ」などというキワ物でも，まだほかの番組よりはマシだと思っています。

ですから，そういう番組をずいぶん見てきたのですが，最近になって，ちょっと気になることがでてきました。珍しい動物の生態が写しだされるのはうれしいことなのですが，そしてブラウン管には，その動物のほかに人間などはだれひとり写っていませんが，しかし，このフィルムを撮った人はいたのにちがいありません。そして機材などを運んだ人もいたはずで，そうした人たちも入れれば，相当な数になるでしょう。

このくらいは，しかたがないとしても，前にもワシが飛んでいるのを上から写したシーンがテレビに出ましたが，あれはヘリコプターで撮ったのでしょう。白鳥が湖からいっせいに飛びたつシーンでは，湖面にヘリの影が写っていました。爆音に驚いて飛びたったのでしょうか。

こうなるとカラーテレビに写される美しいシーンを手ばなしで喜んでばかりもいられません。そして，この本にのっている，きれいなカラー写真のなかに，動物をこわがらせ，いろんな無理をして撮ったものはないでしょうか。

そんなことをしてほしくないのです。結局，撮影者の良心に訴えるしかありませんが，「くれぐれもよろしく」とお願いしたいのです。■

（横浜市・千野幸夫・45歳・会社員）

原稿募集

□仲間のひろば　動物界や自然保護に関する意見や主張，本誌に対する要望など。それに，あなたが撮影した自慢の動物写真（説明原稿つき）。原稿の長さはいずれも400字詰原稿用紙2枚以内。

□ペット相談室　ペットの飼育法や病気，購入などについての質問。

□読者の研究・動物ニュース　動物の採集，分布，飼育，観察などについての研究報告。学会，同好会，動物施設などに関する珍しいニュース。原稿の長さはとくに制限ありません。写真やイラストを適当につけてください。

原稿には必ず住所，氏名，年齢，職業，電話番号をお書きください。なお，お送りくださった原稿，写真は原則としてお返しいたしません。

送り先　東京都千代田区有楽町2の3（〒100）
朝日新聞社『世界動物百科』編集部「私たちの仲間」係

裏表紙説明

サン・マルコ広場のドバト　花のパリかロンドンか，いえいえここはイタリアの，その名も高きベネチアの町。ベネチアといえば運河，運河といえばゴンドラというけれど，ゴンドラばかりが能ではない。ルネサンスの栄華，誇りも高きベネチア共和国の伝統を，今に伝えるサン・マルコ寺院。かのベネチア派の画家たちは，ティントレットにジョルジョーネ，カルパッチオにティチアーノ，だれもがみんなこの広場を，ハトをかきわけ歩いたのでありましょう。117の小島からなるベネチアの町を，運河も橋も必要とせず，ハトは自由に飛びかっているのです。まことにハトは平和と自由の象徴。ルネサンスの自由人たちも，ハトほどに思うままには飛行できずに終わったことでしょう。　Ph. Aarons

次号予告

2月14日発売



ジュズカケバト

世界動物百科
100号　2／25

カラーページ

ハト目　ハト科（つづき）
シラコバト，ヒムネバト，ミノバト
カンムリバト，オオハシバト
アオバト

ドードー科　モーリシャスドードー

サケイ科　サケイ，シロハラサケイ

私たちの仲間

サファリ（下）　生物進化の跡　小原秀雄

悲しき習性　その2　アマゾン動物記 12　伊沢紘生

ハトの嗉嚢と心理的繁殖　カラーページ解説　黒田長久

生きものの世界への疑問 5　突然変異ということば　日高敏隆

漢字のふるさと 71　鳩（はと）　藤堂明保

第65号～第128号（鳥類）のおもな内容

● 数字は号数，白ぬき数字は既刊

65 鳥綱　概説
66 スズメ目　アトリ，ゴシキヒワ，マヒワ
67 スズメ目　カナリア，ウソ，イスカ
68 スズメ目　シメ，ムネアカイカル，ホオジロ
69 スズメ目　スズメ，キンランチョウ，ブンチョウ
70 スズメ目　ベニフウキンチョウ，メジロ
71 スズメ目　ムクドリ，フイア，モズ
72 スズメ目　キセキレイ，タヒバリ，イワヒバリ
73 スズメ目　キビタキ，オオルリ，ココシキリ
74 スズメ目　ウグイス，セッカ，キクイタダキ
75 スズメ目　コマドリ，ナイチンゲール，ノビタキ
76 スズメ目　イソヒヨドリ，ウタツグミ，ツグミ
77 スズメ目　ミソサザイ，カワガラス
78 スズメ目　ヒヨドリ，ソウシチョウ，キバシリ
79 スズメ目　ゴジュウカラ，エナガ，シジュウカラ
80 スズメ目　オオフウチョウ，マダラニワシドリ
81 スズメ目　カケス，カササギ，オナガ
82 スズメ目　ホシガラス，ハシボソガラス
83 スズメ目　コウライウグイス，ツバメ，ヒバリ
84 スズメ目　コトドリ，ヤイロチョウ
85 キツツキ目　キリハシ，ノドグロミツオシエ
86 キツツキ目　ハシボソキツツキ，アオゲラ
87 ブッポウソウ目　カワセミ，アカショウビン
88 ブッポウソウ目　ハチクイ，ブッポウソウ
89 ブッポウソウ目　オオサイチョウ
キヌバネドリ目　ケツァール
90 ネズミドリ目　アオエリネズミドリ
アマツバメ目　ヨーロッパアマツバメ
91 アマツバメ目　ノドアカハチドリ
92 ヨタカ目　アブラヨタカ，ヨーロッパヨタカ
93 フクロウ目　メンフクロウ，コノハズク
94 フクロウ目　コキンメフクロウ，アオバズク
95 フクロウ目　コミミズク，フクロウ
96 ホトトギス目　ホトトギス，カッコウ
97 オウム目　オオバタン，キバタン
98 オウム目　コンゴウインコ，セキセイインコ
99 ハト目　カワラバト，キジバト
100 ハト目　シラコバト，カンムリバト，サケイ
101 チドリ目　タマシギ，ミヤコドリ，コチドリ
102 チドリ目　オグロシギ，イソシギ
103 チドリ目　タシギ，ヤマシギ，エリマキシギ
104 チドリ目　セイタカシギ，トウゾクカモメ
105 チドリ目　ユリカモメ，カモメ，ベニアジサシ
106 チドリ目　ヒメウミスズメ，ウミガラス
107 ツル目　クロヅル，カンムリヅル
108 ツル目　フユクイナ，バン，コヒレアシ
109 ツル目　ジャノメドリ，カグー，ノガン
110 キジ目　ツカツクリ，ライチョウ
111 キジ目　クビワシャコ，ウズラ，ニジキジ
112 キジ目　ニワトリ，キジ，キンケイ，ギンケイ
113 キジ目　マクジャク，シチメンチョウ
114 ワシタカ目　コンドル，ヘビクイワシ，トビ
115 ワシタカ目　ハイタカ，イヌワシ，ハクトウワシ
116 ワシタカ目　クロハゲワシ，ヒゲワシ，ミサゴ
117 ワシタカ目　ハヤブサ，チョウゲンボウ
118 ガンカモ目　ツノサケビドリ，オオハクチョウ
119 ガンカモ目　ガチョウ，ヒシクイ，マガン
120 ガンカモ目　マガモ，アヒル，オシドリ
121 ガンカモ目　ホシハジロ，クロガモ，カワアイサ
122 コウノトリ目　ベニフラミンゴ，ゴイサギ
123 コウノトリ目　シュモクドリ，コウノトリ，トキ
124 ペリカン目　オオペリカン，シロカツオドリ
125 ペリカン目　カワウ，ウミウ，グンカンドリ
126 ミズナギドリ目，カイツブリ目，アビ目
127 シギダチョウ目，キーウィ目，ヒクイドリ目
レア目，ダチョウ目
128 ペンギン目　キングペンギン，コビトペンギン
以下 129～144　両生類，爬虫類
145～160　魚類　161～192　昆虫類，甲殻類他

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

1 概説 I　生態学，自然保護
2 概説 II　動物分類学，生物学的環境
3 霊長目　ゴリラ
4 霊長目　チンパンジー，オランウータン
5 霊長目　テナガザル，オナガザル
6 霊長目　カニクイザル，ヒヒ
7 霊長目　キヌザル，オマキザル
8 霊長目　メガネザル，キツネザル，アイアイ
9 食虫目　ツパイ，モグラ，ハリネズミ
10 翼手目，皮翼目　コウモリ，ヒヨケザル
11 齧歯目　ヤマアラシ，チンチラ，ミズブタ
12 齧歯目　トビネズミ，ヤマネ
13 齧歯目　家ネズミ，野ネズミ
14 齧歯目　レミング，ビーバー，ハムスター
15 齧歯目　リス，ムササビ
16 齧歯目　ウサギ
17 食肉目　チーター，ライオン
18 食肉目　トラ
19 食肉目　ヒョウ，ジャガー
20 食肉目　ピューマ，ヤマネコ
21 食肉目　イエネコ
22 食肉目　ハイエナ，マングース
23 食肉目　ジェネット，カワウソ
24 食肉目　スカンク，アナグマ
25 食肉目　テン，クロテン
26 食肉目　ミンク，イタチ
27 食肉目　パンダ，アライグマ
28 食肉目　マレーグマ，ホッキョクグマ
29 食肉目　ヒグマ，ツキノワグマ
30 食肉目（家犬）　イヌ概説，盲導犬，警察犬
31 食肉目（猟犬）　グレーハウンド，セッター
32 食肉目（番犬）　日本犬，セントバーナード
33 食肉目（愛玩犬）　スピッツ，チワワ
34 食肉目（野生犬）　ディンゴ，リカオン
35 食肉目　キツネ，ホッキョクギツネ
36 食肉目　オオカミ，コヨテ
37 食肉目　アザラシ
38 食肉目　セイウチ，オットセイ，トド
39 奇蹄目　サイ，バク
40 奇蹄目　ウマ概説
41 奇蹄目　サラブレッド，ポニー
42 奇蹄目　ロバ，ラバ，シマウマ
43 岩狸目，長鼻目　イワダヌキ，ゾウ
44 偶蹄目　ヒツジ
45 偶蹄目　バーバリシープ，アイベックス
46 偶蹄目　ヤギ，カモシカ
47 偶蹄目　ガゼル，インパラ
48 偶蹄目　ブラックバック，ヌー
49 偶蹄目　ローンアンテロープ，ダイカー
50 偶蹄目　バイソン，アフリカスイギュウ
51 偶蹄目　ウシ，スイギュウ
52 偶蹄目　イランド，ブッシュバック
53 偶蹄目　キリン，オカピ，ノロジカ
54 偶蹄目　トナカイ，ヘラジカ
55 偶蹄目　アカシカ，マメジカ
56 偶蹄目　ラクダ，ラマ
57 偶蹄目　カバ，ペッカリー
58 偶蹄目　イノシシ，ブタ
59 貧歯目，有鱗目，管歯目　アリクイ
センザンコウ，ツチブタ
60 海牛目，鯨目　ジュゴン，ナガスクジラ
61 鯨目　イルカ，マッコウクジラ
62 有袋目　カンガルー，バンディクート
63 有袋目　コアラ，フクロネコ
64 単孔目　カモノハシ，ハリモグラ
概説・哺乳類索引

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100
TEL. 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530
TEL. 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802
TEL. 093－531－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460
TEL. 052－231－8131

世界動物百科　通巻100号　昭和48年2月18日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人 大田信男　発行所 朝日新聞社 東京 大阪 北九州 名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



サンマルコ広場のドバト　説明 30ページ